

# 民主化期のインドネシアにおける大衆動員のあり方 ——ジャカルタ地方政治のポピュリズム化とブタウィのエスニシティ組織——

中 村 昇 平 \*

## Mode of Mass Mobilization in the Midst of Democratization: Popularizing Local Politics and Betawi Ethnic Organizations in Jakarta

NAKAMURA Shohei\*

### Abstract

The fall of Suharto's authoritarian regime and the subsequent dissolution of vertical political patronage led to an upsurge of mass mobilization based on religion and/or ethnicity. In Jakarta, newly emerged vigilante groups that initially sought to represent small-scale neighborhood communities rapidly grew in size by receiving endorsements from local political authorities as well as by gaining extensive popular support. Despite their persistent association with violence and illicitness in popular discourse, some of those vigilante groups quickly increased their membership to hundreds of thousands. Highlighting the activities of the Forum Betawi Rempug (FBR), one of the biggest of these groups, this paper explains the causes, processes, and consequences of its expansion.

The nature of the Betawi ethnic identity that has been constructed over decades, as well as an alternative mode of populist discourse that became prevalent in Jakarta during the last couple of decades, were the key background conditions through which such groups expanded in both size and geographic reach. These conditions also led to a loosely disciplined and highly autonomous organizational structure.

An explanation of this process calls for a radical revision of the conventional model of ethnic mobilization that takes for granted disciplined organization and hierarchical control. In contemporary Jakarta, successful mass mobilization is not the sheer result of people's response to populist calls. Attention must be paid to the logic of the mobilized in order to explain why vigilante organizations have been able to gain popular support despite their notorious reputation. This paper investigates the perspectives of the mobilized by focusing on neighborhood-level activities of the FBR. In so doing, it exemplifies how some residents perceive the FBR as a provider of potential socioeconomic resources for the enhancement of their life environment.

---

\* 金沢大学人間社会研究域 日本学術振興会特別研究員 (PD) : JSPS Research Fellow, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, Ishikawa 920-1164, Japan  
e-mail: fodelsekontroll@gmail.com  
DOI: 10.20495/tak.58.2\_204

**Keywords:** Indonesia, democratization, populism, local politics, mass mobilization, ethnicity, Jakarta, Betawi

キーワード：インドネシア，民主化，ポピュリズム，地方政治，大衆動員，エスニシティ，ジャカルタ，ブタウィ

## はじめに

1998年のスハルト権威主義体制崩壊を機に大統領を頂点とする集権的パトロネージ構造が弱体化したインドネシアでは、民主化の波とともに宗教・民族に依拠した大衆動員が急速に広まった。首都ジャカルタでも、土着のエスニシティである「ブタウィ」(Betawi)を標榜する組織が相次いで設立された。当初は近隣地域を地盤とする自警団として設立されたこれら組織の一部は、地方の政治アクターからの支援を受けるとともに大衆からの広範な支持を獲得し、急速に成員数を増加させた。本稿は、ジャカルタ大都市圏<sup>1)</sup> 全域に170万の成員を抱える「ブタウィ結束フォーラム」(Forum Betawi Rempug: FBR)<sup>2)</sup>を取り上げ、2010年頃までの動向を考察する。この考察を通して、権威主義体制崩壊後の地方分権化とポピュリズム化を色濃く反映するジャカルタ首都圏の政治状況下で、大衆動員のあり方がどのように変容したのかを説明する。

現代のジャカルタでは、エスニシティを資源とした動員の呼びかけに住民が無条件に応じることは少ない。民主化期ジャカルタの大衆組織が政治的・社会的影響力を拡大した要因は、デモへの参加や選挙での投票行動において民衆を動員したことよりもむしろ、成員数の急速な増加を達成したことと、地方レベルの政治アクターの支持を獲得したことにある。先行研究の議論もこうした動員形態の変容を前提として進められてきたが、この状況は、先住民の意識に浸透していた「ブタウィ」という集団観念の性格と、ジャカルタという地域にいち早く浸透した新しいポピュリズムの性格とを考慮に入れなければ十分には理解できない。

加えて、生活資源を搾取する主体に転じる危険性を多分に孕む自警組織が大衆の広範な支持を受けた要因は、動員される側の論理にも着目しなければ説明できない。この観点から本稿は、動員する側の論理のみからエスニシティの政治を説明しようとする研究では過小評価されてきた、動員される側が組織の提供する社会経済的資源を積極的に利用する側面に注目する。本稿は、分権化とポピュリズム化の進展がもたらした、不安定ではあるが明確な政治社会状況の変化を、動員の呼びかけを行う側のみならず、動員される側の成員がどのように認識し、そこにどのような可能性を見出しているのかを考察する。この考察から、エスニシティを資源とした

1) 通称「ジャボデタベック」(Jabodetabek)と呼ばれる地域。ジャカルタの他、ボゴール (Bogor)、デポック (Depok)、タンゲラン (Tangerang)、ブカシ (Bekasi) を含む。

2) ルンブック (rembug), またはルンブック (rembug) は、ブタウィ語で「同意, 団結, 総意の一致」(インドネシア語の *akur, sepakat, seia-sekata*) を表す [Chaer 1976: 308]。

大衆動員が、都市の大多数を占める中下層の人々の生活上の不確実性（uncertainty）を縮減する回路の一つになる可能性を提示する〔Simone 2014〕。

第I章ではまず、権威主義体制崩壊後のインドネシアで活発化した、エスニシティが絡む政治動員を扱った研究を概観する。その上で、先行研究にみられる、エスニックな政治動員という社会過程がエリートの合理的判断のみによって決定するという前提と、大衆の動向が帰属意識と結びついた感情や情動のみによって決定するという前提の双方から距離をとることの重要性を指摘する。加えて、民主化期のインフォーマル領域における政治動員の変容に注目した研究を概観し、近隣地域を基盤としたローカルでインフォーマルな政治状況において、命令系統と動員経路の流動化が顕著となっていることを指摘する。

こうした社会状況を念頭に置いて、第II章では、FBRの動員の特徴を、ジャカルタ大都市圏に特有の社会状況から説明する。特に、ブタウィ・エスニシティの帰属意識の特徴、および、ジャカルタ地方政治のポピュリズム化に着目することで、FBRの組織構成と活動が、本部からの上意下達の指揮系統ではなく、支部レベルの活動の自律性に依拠していることを示す。加えて、第III章では、FBR末端支部の幹部や成員が組織参加にどのような利益を見出しているのかを考察する。FBRという組織がなぜ広範な大衆の支持を獲得することができたのかを、動員される側の論理にも注目して説明することを試みる。

本稿は、インドネシアという国家の政治社会状況の変化を踏まえながらも、一地方としてのジャカルタに固有の経緯に即して大衆動員を考察する。またその際、動員される側の論理に注目する。最終的に、国家レベルの制度や社会状況の変化のみに還元して地方ごとの状況を理解することはできないということ、政治アクターや動員者の動向のみから動員の大衆化を説明することができないということ、ジャカルタの事例から示す。

本稿の議論は、関連する先行研究や新聞記事、組織内部資料（付録1および付録2を参照）のほか、著者が2013年2月から2014年3月にかけて断続的に行った現地でのインタビューに拠っている。インタビュー調査はFBRの中央執行部（*pengurus pusat*）、4つの行政市レベルの支部（コルウィル〔*korwil*〕）の代表、および5つの近隣地区レベルの小規模支部（ガルド〔*gardu*〕）に対して行った。調査対象者のプライバシーと安全面への配慮から、支部の所在地や成員の名前、プロフィール等の詳細は一部伏せている。

## I エスニシティを資源とした政治動員

スハルト権威主義体制の崩壊とそれに伴う急速な地方分権化は、複数の民族紛争・分離主義独立運動を引き起こし、あるいは激化させた。政権党ゴルカルが弱体化したために、権力構造の末端で地方の権力を握っていた党地方幹部や地方役人は中央からの安定的な支援を失い、地

元における権力基盤を再構築して支配機構における地位と経済的資源へのアクセスとを確保する必要に迫られた。彼らは自身の役割に正当性を付与するために地域の利益を代表する「伝統的な」指導者として自らを提示し、各地で民族や旧王朝、慣習法といった、本源的帰属意識を標榜した政治動員を行った [Davidson and Henley 2007; Schulte Nordholt 2003]。こうした状況は研究者や観察者に国家の分裂さえ憂慮させた。

しかし 2005 年頃を境として武力紛争は急速に沈静化し、インドネシアは「緩やかにエスニシティ原理が働く政体」(a weakly ethnicized polity) に落ち着いた [Aspinall 2011: 296–297]。E. アスピノールによればこの背景には、選挙制度改革、<sup>3)</sup> 政治経済資源の分権化、分離主義独立運動の主要な活動家と国家の間のパトロン＝クライアント関係の構築、という 3 つの要因があった [Aspinall 2010: 25–29]。民主主義的制度改革、特に地方政党の禁止と権力・財源の地方への移譲とによって、インドネシア国家の権力と資源の分配構造は、地方の本源的紐帯を掲げる組織を末端とした地方分権的構造へと姿を変えた。

民主化期の地方社会の変容は、地方分権化に伴う制度上の変化をはじめとして、文化政策・教育制度の変化や、行政村と慣習村の関係の変容、住民生活の変化に至るまで、様々な側面から考察されている。<sup>4)</sup> しかし本稿が対象とする自警団的組織から派生したプタウィの大衆組織は、その活動にみられる暴力性と非合法性のために、専ら民主化期インドネシアにおける暴力の発露という観点から議論されてきた。こうした事情から、I-1 では、権威主義体制崩壊後に国内各地で発生した暴力的紛争に関する先行研究を概観し、I-2 では、自警団的組織が台頭する背景となったインフォーマルな政治経済の変容について整理する。

### I-1 エスニシティが絡む紛争状況の活発化

民主化直後のインドネシアでは、暴力的衝突を伴う政治動員や紛争が各地で頻発したが、当初の研究には、客観的に観測できる宗教・民族構成や、各地域に特徴的とされる多文化状況から紛争・暴動の原因を説明するものが多かった。その後、定量的データから割り出された人口構成や、非歴史的に想定された文化状況に依拠した分析に対する批判から、歴史的経緯への注目を促す議論が出てきた。J. ベルトランは、制度的側面の変遷から動員を説明する「歴史的制度論」(historical institutionalism) のアプローチを採用し、政治制度上の「重大な岐路」(critical juncture) を起点にエスニシティを資源とした動員を説明しようとした [Bertrand 2004: 3–8; 2008]。G. ファン・クリンケンはその方向性到大筋で同調しながらも、「岐路」のみから事象の

3) 1999 年以降の選挙では、単一選挙区から複数人の当選者が選ばれるようにして、勝者と敗者の間に絶対的な差がつかないようにするとともに、地方政党を禁止することで国家内の分裂が深刻にならないよう配慮された [Aspinall 2010: 25–26]。

4) 民主化期インドネシア地方社会の変容を包括的に論じたものとしては、杉島・中村 [2006] や Davidson and Henley [2007], Schulte Nordholt and van Klinken [2007], 鏡味 [2012] などを参照のこと。

推移を説明しても原因の説明にはならないと批判した。彼は、民主化と地方分権化という制度上の岐路を念頭に置いた上で、地方におけるエリートの物質的利害関心に注目してその動向を説明することこそが「集団的動員」(communal mobilization)の原因を解明することになるという立場をとった [van Klinken 2007: 21, 33]。

しかしながら、政治的動員過程を動員者の動向のみから分析する視点は往々にして、社会的亀裂・対立の要因を分析に先立って前提とした集団境界に帰結させてしまう。本源的紐帯論 (primordialism) への表面的な批判を根拠として用具論 (instrumentalism) 的視点に過剰に依拠する研究は、R. ブルーベーカーの表現を借りれば、「分析上の集団主義」(analytical groupism) の誤謬に陥る危険性を抱えている [Brubaker 2004: 7-27]。そこでは分析対象となる組織や運動の動向が、集合的利益を達成する目的でとられた行動として解釈される。エスニシティを原理とした運動や組織を一枚岩と見做す前提に立ってその「集合的利益」の遂行過程を見ようとすれば、集団境界や動員の過程が運動や組織の指導者層の意向によってのみ決定されるという誤認を導く [ibid.]。<sup>5)</sup>

C. ウィルソンは、外部から客観的指標で観測できる集団境界によっては説明できない政治動員の事例として、キリスト教徒とイスラーム教徒が長く共存してきた北マルクで勃発した紛争を取り上げた。彼はこの事例を分析するにあたって、社会運動や政治動員に関わる議論を概観した上で、動員者に注目する視点と大衆に着目する視点の双方を批判的に整理し、両者を折衷する方向性を提示する。その際彼が指摘するのは、エリートの動向を合理的な打算や戦略の結果として説明する見方と、大衆の動向を非合理性や感情と結びつける見方の、双方が孕む危険性である。彼は、エリートの行動が必ず合理的判断に即したものであるわけでもないし、大衆の動向が全て情動的な要因や集団帰属に従うわけでもないという点を強調したのである [C. Wilson 2008: 15-28]。

本稿の考察は民主化期インドネシア社会の変容を念頭において進めるが、以上のような議論を踏まえ、国家レベルの社会状況の変容がジャカルタという地方の政治社会状況に具体的にどのような影響を与えたのかという点に特に注目する。また、動員者側の論理や事情だけからFBRの動員の変容を説明しようとするのではなく、動員される側の論理や事情にも注目してFBRの大規模化を説明することを試みる。以下、I-2ではまず、FBRをはじめとする自警団的

5) そもそもギアツ [Geertz 1963] の本源的紐帯論は「本源的感情」(primordial sentiment) を所与のものと想定していたわけではなく、その問題点は「参与者の原初主義」(participants' primordialism) が構築される原因や過程の考察を棚上げするところにあったという指摘は以前からなされてきた [Smith 1998: 158]。用具論的視点を採用することが、動員の説明原理を(本源的紐帯に求める代わりに)政治的利益に求めるということの意味するのであれば、根本的な問題は解決されたことにはならない [Brubaker 2004: 84]。動員される側がなぜ特定の動員に応じるのかということを説明する必要性がナショナリズム研究の領域で議論されてきたのも、こうした問題意識からだった [Fox and Miller-Idriss 2008; Whitmeyer 2002]。



組織の性格が変容してきた背景として、権威主義体制崩壊後のインフォーマル領域の政治状況の変化を概観する。

## I-2 インフォーマル領域における政治経済活動の変容

ジャカルタ周辺で自警団から派生した大衆組織を対象として考察を行なったI. D. ウィルソンは、動員者の動向のみに注目する議論が上意下達のパトロン＝クライアント構造を前提としていることを批判する。その上で、動員される側の成員や近隣の地域住民が直面する問題に関して、大衆組織が彼らの直接の代弁者となる可能性を模索すべきであると主張する [I. D. Wilson 2015: 94]。彼によれば、現在のジャカルタにおける大衆組織は直線的のパトロネージ関係には組み込まれておらず、支配関係は「ポピュリズム的非合法活動という特異な区分」において展開するようになった [ibid.: 172]。具体的には、固定的なパトロン＝クライアント関係に沿って安定的な利益供与を行うのではなく、組織の立場や枠組みを利用して支部ごとに安価なインフォーマルセクターの仕事を末端成員に分配することで、不特定多数の成員を獲得するという方針をとる大衆組織が増加したという。

ジャカルタの例に限らず、インフォーマルな政治経済活動の領域で展開する「ストリートの政治」に注目する議論は、民主化後にインフォーマル領域の政治状況が変化したことを強調してきた。権威主義体制が崩壊すると中央政府は求心力を失い、軍が地方の暴力集団を手なづけることで全国各地に張り巡らされていた治安機構 [Barker 1998: 39-40; Ryter 1998: 63-70] も事実上立ち行かなくなった。そのため、中央政府からの後援と庇護を失った諸アクターは、新たなパトロンを探るか、新しい動員形態を模索することとなった。

そうした状況下で、フォーマルな行政機構や市場経済制度が管理・把握しきれない領域で展開するインフォーマルな政治経済活動の性格も大きく変化した。この種の活動の多くには、公的な空間・資源・権威に対する不法／非合法的な侵犯や占拠が伴う反面、合法的な制度・機構との末端レベルでの結びつきがその非公式的権威を担保するという側面がある。インドネシアでは、インフォーマルな政治経済領域やそこで活動する非公式なアクターは非合法的、反（市民）社会的であるという含意を込めてプレマニズム (*premanisme*)、プレマン (*preman*) と呼ばれ、頻繁に研究対象となってきた [Simone 2015: S20]。

西ジャワ州バンドウン市チチャダス (Cicadas) 周辺地域のスラム地区を対象にインフォーマル領域の権威を取り巻く動態を考察したJ. バーカーは、近隣地域レベルで影響力を行使する政治アクターの性格が変化したことを論じた。当該地区では、軍との繋がりや武術家としての名声を背景に1970年代から90年代にかけて影響力を確立した旧世代のアクターたちがまだ一定の影響力を保持している一方で、フォーマルな機構と固定的な連携を取らず、非暴力的で企業家的な政治動員を志向する新世代のアクターたちが目立つようになったという [Barker 2009:

49]。ただしチチャダスの事例では、新世代のアクターは近隣地区を超えた広範な動員を志向しているわけではないという [ibid.: 72]。

逆に、こうしたインフォーマルな活動が大規模な政治動員に繋がった事例も報告されている。ブルマナは、西ヌサ・トゥンガラ州中部ロンボク県で貴族の血筋をもつ地元の有力者であるマミク・ンゴ (Mamiq Ngoh) と、彼の影響下にある自警組織の事例を取り上げた。窃盗犯への私刑も辞さない自警組織の評判を背景に治安の向上を訴えたマミクは、2005年市長選挙に当選した。ただし彼は、市政において治安向上の実績を示すことができなかったために、再選されることはなかったという [Permana 2019]。岡本とハミドが取り上げたバンテンの事例では、この地方で政治的影響力を確立した「ジャワラ」であるハサン・ソヒブ (Chasan Sochib) が、高度に統制された選挙動員によって2006年州知事選挙で自身の娘を当選させた [岡本 2015; Okamoto and Hamid 2008]。これは、武術協会や宗教指導者組織、エスニシティ組織、若年知識人層の組織、果ては地方官僚のネットワークまでを一元的に組織化した動員だったため、彼女は再選を果たしたのだという [岡本 2015: 258]。

FBRは、バンドゥンの事例に見られたような新しいタイプの動員のあり方が大規模な動員に結びついた例ではあるが、地方首長選での当選のような、フォーマルな政治領域への本格的参入には結びつかなかった。また、その動員様式には、バンテンに見られたような上意下達の統制も見られない。

ジャカルタにおけるストリートの政治に関しては、A. シモーネが「プレマンの結びつき」 (associations of *preman*) にみられる政治的連携と動員の流動性を指摘している。ジャカルタのプレマンの特徴として彼が述べるのは、潜在的な繋がり の模索と統制能力の見せかけである。彼がまず強調するのは、活動時間の大半を縄張りの統制保持に費やさなければいけないはずのプレマンが示す、情報収集能力の高さである。自分がいない場所で起こる出来事の動向を詳細に把握し、状況によっては利害が一致するかもしれない潜在的な提携先を常に探し出そうとするとその特徴があるという。もう一つの特徴は、直接的動員能力の欠如に関する自覚である。情報収集の結果を利用して政治家やデベロッパ、軍関係者などと提携する際、彼らプレマンは、縄張りとする地区を全体的に統制する能力など自分にはないとよく承知しているからこそ、効果的な動員が行えるだけの影響力をもつかのように見せかけることに尽力するのだという [Simone 2015: S20-S21]。

ウィルソンは、こうしたインフォーマルな政治関係が広域化する際に、上意下達的な動員経路や組織構造に結びつくかわりに、政治的提携の流動性を維持したままに大規模化したと論じる。この点を彼は、FBRを例にとり、「都市全域にまたがるフランチャイズ支部のネットワーク」ともいうべき組織構造を基盤とする「ポピュリズム的」動員形態の普及として説明する [I. D. Wilson 2015: 120]。彼によれば、ポピュリズム志向の高まりとフランチャイズ支部のシス

テムが、流動的な政治的提携を特徴とするインフォーマル政治のあり方と結びついたことで、FBRは実質的な命令系統も動員経路ももたないにもかかわらず、あたかも大衆動員に直接的な効果をもつかのごとく振舞い、政治アクターからの支持を取りつけることが出来るようになっていった。

民主化の波が押し寄せる中で流動化した政治的忠誠は「強大な権力をもつパトロンへの垂直的依存関係からはほど遠い」ものとなり、「断片的で頻繁に推移する提携」へと移行した [ibid.: 83, 147]。政治アクターへの支援に対して必ずしも見返りが得られない状況が明らかになると、FBRは特定の党派に対して固定的な提携を行わないことを原則とするほどの懐疑主義的態度を取るようになった [I. D. Wilson 2006: 281–282]。

2012年ジャカルタ州知事選挙<sup>6)</sup>も、政治アクターとの繋がり流動性をよく示していた。フォケ・ナラのプタウィ人ペアとジョコウィ・アホックペアとの決選投票の末に後者が当選したこの選挙で、FBRはフォケとナラへの支持を公式的には表明していた。ところが、FBR代表のルトフィ (Lutfi Hakim)<sup>7)</sup>は、「我々は、公式には〔プタウィ諸組織の統括団体である〕バムス・プタウィ<sup>8)</sup>を支持しているから〔その代表であった副知事候補の〕ナラを支持したのであって、フォケを支持したのではない」と明言した。彼によれば、FBRが組織として上意下達的に成員へ投票の働きかけをすることもなかったという。<sup>9)</sup>このように、FBRが特定の行政機関やフォーマルな機構、政治アクターと固定的で持続的な同盟関係やパトロン＝クライアント関係を結ぶ傾向は低い。地方政治が多様な政治的利害の競合する舞台となったことで、フォーマルな政治的権威の後ろ盾を得ることは、プレマン組織の生き残りとして成長にとって必要条件ではなくなった。こうした提携は、せいぜい短期的な都合のためになされる場合にしか合理性を

6) 2012年ジャカルタ州知事選挙は、フォケ (Foke, 本名ファウジ・ボウォ [Fauzi Bowo], 知事候補で前職) とナラ (Nara, 本名ナフロウィ・ラムリ [Nachrowi Ramli], 副知事候補) のプタウィ人ペアと、ジョコウィ (Jokowi, 本名ジョコ・ウィドド [Joko Widodo], 知事候補) とアホック (Ahok, 本名バスキ・チャハヤ・プルナマ [Basuki Tjahaja Purnama], 副知事候補) ペアとの間での決選投票となり、後者が当選した。

7) 2代目代表。前代表の兄の息子で、2009年に前代表の急逝に伴って代表に就任した。

8) バムス・プタウィ (BAMUS Betawi, 正式名称はプタウィ住民協議会 [Badan Musyawarah Masyarakat Betawi]) は、「プタウィ」を掲げる諸団体の統括組織として1982年に行政の主導で設立され、設立時点で存在した親族組織、大衆組織、職能組織、学生組織など20の組織がその傘下に位置づけられた。職能組織の中には、1982年の選挙キャンペーン中に形式上作られたものもあったという [Shahab 1994: 295–318, 330–332]。

9) FBR代表へのインタビュー (2013年3月、於FBR本部事務所)。中央執行部の人間に限らず、プタウィ人候補の落選と、非プタウィ人でジャカルタ出身ですらない対立候補の当選を悲観的には捉えないFBRの成員や支持者は多かった。多くの人は対立候補の当選と来るべき改革に期待感を表明するか、こうした政治情勢を冷静に受けとめていた。東ジャカルタのある小規模支部代表は、FBRは組織として公式にはプタウィ人候補への支持を表明していたが、成員の中には対立候補に投票する者が多かったであろうという見解を述べている。そのことに関して彼自身悪い感情を抱いてはいないし、選挙時もプタウィ人候補への投票を組織的に働きかけることはなかったという (当該支部代表へのインタビュー、2013年2月、於東ジャカルタ)。



もたなくなった。<sup>10)</sup>

ウィルソン [2015] は、ジャカルタにおけるインフォーマルな政治の変容を詳細に説明することでFBRが急速に拡大した経緯を説明しようとした。しかし、FBRがポピュリズム化・フランチャイズ化するに至った背景と要因を十分に論じているとは言い難い。第II章では、その一因となったジャカルタに特有の社会的背景を、プタウィの人々の帰属意識の特徴とジャカルタにおけるポピュリズムの特徴とから説明する。

ただし、組織の大規模化の要因を動員形態のポピュリズム化のみから説明することはできない。動員される側の人々の視点から、末端支部の成員が組織への参与にどのような利点を見出しているのかという側面にも注目する必要があるだろう。ウィルソンは、エスニシティを標榜する大衆組織が、単純な成員数の増大という目的を越えて、貧困や社会的排除の解決を射程に入れた、「ストリートをより直接的に代弁する社会運動」に発展する可能性に期待を寄せる [I. D. Wilson 2015: 174]。こうした観点から彼は、タナ・アバン (Tanah Abang) とパサール・ミンゲ (Pasar Minggu) という2つの市場地区における支部レベルの組織活動の考察から、動員される側の成員が組織活動に参加する要因を説明しようとする。しかし、その考察では、インフォーマルな経済活動と縄張り統制の政治を通して住民を搾取する主体としての支部代表の姿が描かれるにとどまる。第III章ではこうした側面に加えて、地域住民の利益増進に積極的に取り組もうとする末端支部成員にも言及することで、組織が地域住民の支持を得る可能性もあるからこそ急速な拡大が達成されたことを論じる。こうした側面に注目しない限り、この種の大衆組織がストリートを代弁する社会運動に発展する可能性を論じることもできないだろう。

10) 個別の政治家との提携のほかに、州政府とジャカルタ都市警察（正式名称はジャカルタ大都市圏地域警察 [Kepolisian Daerah Metropolitan Jakarta Raya]、略称をメトロ・ジャヤ地警 [Polda Metro Jaya] といい、ジャカルタ首都特別地域州以外に周辺地域も管轄する）からの支援は注目に値する。州政府とジャカルタ都市警察は、ジャカルタの都市空間における治安を統制可能なものとするために、プタウィ系組織が台頭する状況を利用しようと画策した。2000年代初頭からスティヨソ (Sutiyoso) 知事の下でブレマン掃討キャンペーンに乗り出した州政府とジャカルタ都市警察は、当時盛り上がりを見せていた「土着対よそ者」の緊張関係を戦略的に利用する。数度に亘るキャンペーンを通して、州政府は地元のプタウィ人ブレマンを間接的に登用し、東インドネシア出身者を中心とするギャングを掃討していった。ブレマン掃討キャンペーンはジャカルタ全域で2013年まで断続的に実施され、州政府はFBRを含むプタウィ組織の成員を継続的に使用した [I. D. Wilson 2015: 74–79, 116–118; *Jakarta Post* 2009/8/28b]。ジャカルタの治安が東インドネシア由来のギャングによって乱されていると考える州政府と警察当局にとってみれば、治安悪化の元凶に直接対峙するよりも、プタウィを標榜する組織を利用してその活動の安定化を図る方が、治安安定化の方策として合理的だったのだろう。ジャカルタ都市警察の報道官は新聞の取材に対して、プタウィ系組織が裏社会を牛耳るよう間接的に支援する意図があったことを認めている。当局は、プタウィ諸組織の勃興も、そこに現役警察官が設立した組織、ジャヤカルタ兵団 (Laskar Jayakarta) が参入したことも、地域の治安維持戦略の一部であると認めた。その上で、「この戦略のもと、地域の安全を守るにあたって利害関係者との緊密な協調関係を構築する」と明言した [*Jakarta Post* 2009/8/28b]。

## II FBRの動員の特徴

FBRは2001年、東ジャカルタ、チャクン（Cakung）周辺地域の低所得者層のブタウィを代表する自警団として、チャクン出身でイスラーム系大学を卒業したファドロリ（Fadloli el Muhir）によって設立された〔Brown and Wilson 2007: 400〕。その設立の背景にはチャクン周辺地域におけるブタウィ系組織とマドゥラ系組織の対立の激化があったと言われる。しかし、FBRは早い段階から、近隣地域に特有の社会状況に根ざした論理ではなく、全ジャカルタ大都市圏のブタウィに開かれた、抽象化した動員原理を前面に押し出すようになる。すなわち、組織が動員に用いたのは「先住者（＝ブタウィ）対外来者」という一般化されたレトリックであり、彼らの主張は、権威主義体制下の首都開発の中で先住者でありながらその恩恵に与ってこなかったブタウィ人全体の利益を増進し、民族としての誇りを取り戻すことであった〔I. D. Wilson 2006: 276〕。こうして2003年に6万人、2006年に15万人、2009年に30万人と急速にその成員数を増やし、2013年には成員登録が170万人に達した。<sup>11)</sup>

組織規模の増大に伴って、動員の方針も変化していった。FBRは、設立初期には競合組織や敵対勢力との対決姿勢を鮮明に打ち出すことで大衆の関心を引き、暴力的なデモや非合法活動に大衆を動員することで勢力を拡大する方針をとっていた。しかし2010年前後に境にこの方針を転換する。I-2に見たように、政治的提携の流動化に伴ってデモや選挙への動員を通して政治的影響力を拡大することが組織の勢力拡大戦略としての合理性を失っていくにつれ、組織執行部の主要な関心事も、成員数の単純な増加と世間的な評判の向上を通して大衆から支持されているというイメージを強化し喧伝することに移行していった。ジャカルタの大衆動員をめぐる先行研究が「ポピュリズム的」動員への転換として注目してきたのも、こうした方針転換だった〔I. D. Wilson 2015: 172〕。

本章では、ジャカルタ、あるいはブタウィに特徴的な社会状況に着目して、FBRの動員がポピュリズム化・フランチャイズ化し、その動員形態が定着した背景を説明する。以下、II-1ではまず、ブタウィ人の帰属意識の特徴として、エスニシティ内部における集団的差異の認識に着目する。小規模支部の活動に大幅な自律性を認める組織中央指導部の方針の背景に、集落を基礎とした集団的差異の意識があることを論じる。続いてII-2では、近年のジャカルタ地方政治のポピュリズム化の特徴として、大衆の支持を希求する政治アクターが、好戦的姿勢の表明を意図的に避け、再分配政策の遂行能力を強調する傾向が高まったことに着目する。FBRの中央指導部はある時期を境に、支部への上意下達的な統制を敷くことよりも、争いを避け、資源

11) 2003年、2006年、2009年の成員数は先行研究と新聞報道で報告された数字〔I. D. Wilson 2006: 276; 2008: 195; *Jakarta Post* 2009/8/28c; 2010/7/3〕。2013年の数字はFBR代表他へのインタビューによる（2013年3月、於FBR本部事務所）。

の分配を着実にを行うことをアピールするイメージ戦略をとってきたが、その背景には、「非好戦的」で「実務的」と評される新しいポピュリズムが大衆の支持を集めるようになった社会状況があることを論じる。

## II-1 ブタウィ・エスニシティへの帰属意識とFBRの動員

ブタウィ人は一般に、オランダ植民地支配下のバタヴィアに居住していた諸民族が通婚・混住を通して20世紀までにクレオール化し、成立したカテゴリーであるとされる〔Castles 1967; Kanumoyoso 2011; 中村 2014: 6–10〕。独立後は、インドネシア民族 (*bangsa Indonesia*) を構成する下位民族集団 (*suku bangsa*, 脚注17参照) のうち、ジャカルタ大都市圏を本拠地とする民族集団であると規定された。2000年のセンサスによれば全人口500万余りのうち9割以上がジャカルタ大都市圏に居住する〔Indonesia, BPS 2000〕。

ただし、ブタウィのクレオール化の過程は、J.クノールが主張するような、複数集団が単一集団へと同化する単線的過程ではなかった〔Knörr 2010; 2014〕。1960年代以降の国家政策の中で一般化されたカテゴリーとしての「ブタウィ」が押しつけられ、人々の意識に浸透した結果、「ブタウィ」という上位のカテゴリーの下に異なる集団が各々の帰属意識を維持したまま並存することになった〔中村 2014; Shahab 1994; 2001〕。ブタウィの大多数はムスリムであるが、その中でも明確な区別がある。まず、市内中心部出身の人々 (都心部ブタウィ〔*Betawi Tengah*〕) と郊外の人々 (村落部ブタウィ〔*Betawi Udik*〕) は互いを異なる文化伝統や生活形態をもつ集団だと考えていた〔Milone 1966: 260–262; Setiati *et al.* 2009: 60; Shahab 1994: 194〕。<sup>12)</sup> こうした区分はさらに細分化された形で認識・表象されることも多く、<sup>13)</sup> 帰属意識を細分化していけば人々が出身の集落 (*kampung*) に対しても帰属意識に行き着く。<sup>14)</sup> ブタウィ・エスニシティとい

12) 西洋式教育を受けたムスリムの大多数が都心部ブタウィであったために、この地理的区分はしばしば社会的区分との重なりにおいて認識される (脚注32参照)。

13) 例えばA.ハエールは、ブタウィ語を地域ごとに5つの方言 (*sub-dialek, logat*) に分類している〔Chaer 1976: xvii–xx〕。この種の分類は一定程度人口に膾炙しており、日常場面でブタウィの下位分類を説明する際に言及されることも少なくない。

14) 南米やアジア、アフリカ地域を主な対象とするスラム研究や都市開発の文脈でインドネシアの都市を論じる際には、インフォーマルな居住区域を説明する際に「カンブン」や「カンポン」(*kampung*) の用語が使われてきた〔Colombijn and Coté 2015; Leaf 1994: 18; Leitner and Sheppard 2018: 438〕。しかし、ブタウィの人々の日常生活では、「集落」の意味でカンブンが使われる。例えばL.ジェリネックは、集落=カンブンと路地を単位とした近隣地域とを区別した上で、後者のみを考察の対象とすることを明言する〔Jellinek 1991: 26〕。中村はこうした「集落」の一つを取り上げ、その社会構成を考察した。当該集落は路地を基礎とした8つの小地区から成ると認識されていたが、集落・小地区のいずれの地理的範囲も行政システム上の村落や住民組織 (*kelurahan/desa*, RW, RT, 脚注20参照) と合致しなかった〔中村 2018: 4章; 2019; Nakamura 2017〕。行政村落システムに組み込まれていない集落の社会組織や活動がジャカルタ大都市圏の各地域でどこまで存続しているかは定かでないが、集落への帰属は日頃から頻繁に言及されており、同じブタウィ人であっても先住者と外来者の別は強く意識されることが多い〔中村 2018: 62–64, 74–75; 2019: 26–27; Nakamura 2017: 397–398〕。

う概念のあり方と、そこへの住民の意識のあり方は、大衆組織の動員形態にも影響している。

独立後の首都開発の中で、ジャカルタの中下層の住民は政治・経済的に周縁化されてきた。剥奪と搾取の感覚は、先住者であるブタウィの人々の間で特に強く醸成されてきた。こうした感情は文学作品や映像メディアでも繰り返し登場し、人々が日々の経験と関連づけて感じてきたものである [Budianta 2002; Wahyudi 2012]。そしてこの状況は、権威主義体制崩壊までに一層深刻化していた。元々宅地であった空間にもゲーテッド・コミュニティが造成されるようになったことで、貧困層と中間層の生活空間の分断も進展していた [Firman 2004: 351; Leitner and Sheppard 2018: 443]。権威主義の抑圧の下ではこうした感情が社会運動に繋がる可能性は著しく制限されてきたが、民主化によってポピュリズム化と地方分権化の波が押し寄せたことで、ブタウィを標榜する組織も増加した。スハルト体制期には20ほどしかなかったブタウィを冠する組織は、2006年までには全ブタウィ組織の統括組織バムス・ブタウィ傘下のものだけでも70を数えた [Untung 2006: 23]。この数字は、2011年までに114に増加した [Jakarta Post 2011/12/17]。

ブタウィを標榜した大衆動員は、近隣小地区を基盤にした縄張り内の治安を保証する名目でみかじめ料をとる自警組織から出発した。その中には比較的小規模な地域を基盤とし続けるものもあったが、会社を設立して警備事業に参入していくものや、動員原理を急速にポピュリズム化させて大規模な組織となるものも出てきた [Okamoto and Rozaki 2006; I. D. Wilson 2015]。大規模化した組織は、治安維持機能の提供や雇用の創出を通して、国家制度上の社会福祉を享受できない下層住民からの支持を拡大させ、2005年頃までには数万から数十万の人々を動員する組織となった。

ただし、組織が大規模化したことは、エスニシティという抽象的な属性に頼った動員の呼びかけによって直ちに動員が成立するようになったということの意味しない。例えば、比較的小規模な範囲に動員がとどまった組織として、タナ・アバン市場周辺を基盤としたタナ・アバン大家族協会 (Ikatan Keluarga Besar Tanah Abang: IKBT) がある。この組織を結成したのは、当該地域の有力者 (ジャワラ [jawara], 第III章参照) として知られるバン・ウチュ (Bang Ucu [Muhammad Yusuf bin Muhi]) だった。彼は、タナ・アバン発祥の武術の創始者でその流派の名にもなったサブニ (Sabeni) の系譜 [Nawi 2016: 148–150] を継ぐ地域の有力者として名の通った人物だった [I. D. Wilson 2015: 70; Berita Satu 2013/8/16]。

FBRも当初は、チャクン地域に根ざした組織としての側面をもっていた。例えば東ジャカルタ地域支部所属の小規模支部代表の一人は、地域の訪問型宗教教育 (ngaji deprok) を初代FBR代表の兄 (現代表の父) から受けるなど、以前から本部の人間とつき合いがあった。<sup>15)</sup> 動員原

15) 当該小規模支部代表へのインタビュー (2013年8月17日、於東ジャカルタ)。ンガジ (ngaji) はコーラン詠唱会や宗教学習会を意味し、デブロック (deprok) は足をくずして地べたに座ることを意味する。ン

理の一般化は、本部近辺地域の成員と末端成員との意識の違いに明確にあらわれる。FBRに関する先行研究の多くはブタウィ人とマドゥラ人との抗争に言及し、その対抗関係が動員原理の根幹を成すと説明する [Brown and Wilson 2007; I. D. Wilson 2006; 2008]。確かに、本部近辺地域ではこの種の言説が現在でも聞かれる。例えば、東ジャカルタのある小規模支部代表に組織参加の動機を尋ねた際、マドゥラ人の脅威に対して「立ち上がらなければならないと感じた」という答えが返ってきた。<sup>16)</sup> 一方、本部から離れた地域の人々に組織加入の動機を尋ねた場合、「マドゥラ問題」はさほど強調されず、かえって一般的枠組みとしての「ブタウィ性」が強調されることが多い。例えばタンゲラン市地域支部の代表に加入の動機を尋ねた際には「FBRは民族性 (*kesukuan*)、エスニシティ (*etnis*) の社会組織だ。[……] 私は土着の人間 (*putra daerah*) として、ブタウィ人に生まれた者として、義務感からそのFBRの活動に参加したんだ」という答えが返ってきた。<sup>17)</sup>

近隣地域を地盤とする自警団として設立されたFBRは、その直後から成員数と地理的広がりにおいて急速な拡大をみた。東ジャカルタから地理的に最も離れた西方郊外のタンゲラン地域 (現バンテン州タンゲラン市・南タンゲラン市・タンゲラン県) では、先述の地域支部代表が加入した2006年頃には3つの小規模支部に300人ほどの成員がいるのみで、地域支部も3行政区をまとめて統轄する「大タンゲラン地域支部」(*korwil Tangerang Raya*) しかなかった。これが2008年には「タンゲラン市地域支部」(*korwil Kota Tangerang*) と「南タンゲラン地域支部」(*korwil Tangerang Selatan*) に分割された。前者は2013年時点で6つの小規模支部のもとに成員約3,000人を抱え、後者には18の小規模支部があった。<sup>18)</sup>

動員の規模と範囲が拡大する中で、FBRも「マドゥラ人」への対抗というチャクンの個別的状况に根ざした論理に頼るのではなく、集落への帰属意識を基盤とした地域ごとの社会関係に

、ガジ・デブロックは地域のイスラーム教育者 (*guru ngaji*) の家に近隣住民が集まるか、教育者が近隣の家々を訪問して行う宗教学習会・コーラン詠唱会のこと。

16) 当該小規模支部代表へのインタビュー (2013年8月17日、於東ジャカルタ)。こうした認識は組織成員に限ったことではなく、近隣の先住者の日常的意識に浸透したものであるようだ。例えば、組織の成員ではない20代のチャクン出身男性がゴミの散らかった運河沿いを通りながら「昔はこんなにゴミは多くなかった。[……] 都市化問題 (*masalah urbanisasi*) さ。[……] ここに住んでいるのはだいたいマドゥラだ。[道端に座る男女を指して] ほら、あれもマドゥラだよ」と言う時、「マドゥラ」は、都市移民で、川縁に住む不法居住者で、地域の生活環境や経済状況の悪化の原因であると認識されている (調査メモ、2013年2月17日、於プカシ市)。この語りからは、こうした言説が日常において反復されてきたことが窺える。

17) タンゲラン市地域支部代表へのインタビュー (2013年8月12日、於タンゲラン市)。「スク」(*suku*) ないし「スク・バンサ」(*suku bangsa*) は、ネイションとしてのインドネシア民族 (バンサ・インドネシア [*bangsa Indonesia*]) を構成する下位民族集団を指す用語として独立以降に定着したが、インドネシアの文脈を離れて (ネイションの下位集団としての) エスニック集団を指す語としてもしばしば使用される [加藤 1990: 235]。ここでは「スク」を抽象名詞化した「クスクアン」(*kesukuan*) と「エスニシティ」(*etnis*) が互換的に用いられている。

18) 当該地域支部へのインタビュー (2013年8月12日、於タンゲラン市; 2013年11月28日、於南タンゲラン市)。



頼るようになった。このことが、「都市全域にまたがるフランチャイズ支部のネットワーク」が安定的に形成される要因となった [I. D. Wilson 2015: 120]。組織原則・細則にも規定のある通り（付録 1: 7 章；付録 2: 6 章），FBR の組織構成は，中央執行部（*pengurus pusat*，中央指導部 [*pimpinan pusat: pimpus*] と呼ばれる）の下に市・県の行政単位に準じてコルウィル（*koordinator wilayah: korwil*）と称される 11 の地域支部があり，<sup>19)</sup> その下に最小の行政単位である行政村落<sup>20)</sup> を基準に設置されるガルド（*gardu*）と呼ばれる小規模支部が 437 ある（2013 年当時）。ガルド設立のためには 100 人以上の成員が当該行政村落に居住することが条件なので，1 つのガルドは少なくとも 100 人以上の成員で構成される。<sup>21)</sup> さらに，当該地区の成員が 100 名に満たないものはポス（*pos*）と呼ばれ，これも多数存在する（図 1 参照）。<sup>22)</sup>

組織細則には，各支部内部の定期会合に関する規定に加えて，地域支部と傘下のガルドの間，および中央と地域支部の間で毎月の共同会合を開催すべき旨が規定されている（付録 2: 5 章）。著者が調査中に観察した範囲では，組織規約に定められた定期会合の機会に限らず，ガルドや地域支部の成員が地域支部や中央本部を訪問する様子が頻繁に見られた。また，中央本部で毎月開かれる入会式には数百人の新規成員が集まり，組織の展望と使命（*visi-misi*）およびアッラーへの忠誠を誓う。<sup>23)</sup> しかし，支部と密な連携をとろうとする中央執行部の方針にもかかわ

19) 地域支部は 2002 年から順次設置され始めた。2013 年当時，ジャカルタ大都市圏内の第二級自治体（市・県）に準じた各地区に東ジャカルタ，北ジャカルタ，中央ジャカルタ，南ジャカルタ，西ジャカルタ（以上ジャカルタ州），プカシ市，プカシ県北，プカシ県南，デボックおよびボゴール（以上西ジャワ州），タンゲラン市，南タンゲラン（以上バンテン州）の地域支部があった（FBR 代表へのインタビュー，2013 年 3 月，於 FBR 本部事務所）。

20) インドネシアの地方行政システムは，国の下にある第一級自治体（州 [*propinsi*]）を頂点としてその下に第二級自治体（県 [*kabupaten*] / 市 [*kota*]）が続く。さらに郡（*kecamatan*）をはさんでその下に行政村落（都市部では区 [*kelurahan*] / 村落部では村 [*desa*]）が設置されており，区 / 村のトップまでが行政に任命される。行政村落の下に RW（住民会 [*rukun warga*]），さらにその下に RT（近隣会 [*rukun tetangga*]）という住民組織があるが，これらは現在ではその長が住民の直接投票で選ばれるなど，住民自治組織としての性格が強い（ただし 2014 年の法改正以降 RW，RT への公的資金の流れに変化がみられる [Berenschot and Vel 2017]）。

21) 2007 年以降，同一区内に 2 つ以上のガルド / ポスを新設することが禁止されたが，それ以前は 1 つの RW につき 2 つ以上のガルドを設置することが禁止されていたのみであった。それ以降も，既に設置されているガルド / ポスを取り潰されることはないため，例えば本部事務所周辺ではだいたい 1 つの RW につき 1 つのガルドが存在するという（FBR 代表他へのインタビュー，2013 年 3 月，於 FBR 本部事務所）。2013 年当時，東ジャカルタには 92 のガルドがあった（東ジャカルタ地域支部代表へのインタビュー，2013 年 8 月 16 日，於プカシ県）。

22) ただし，組織原則・細則にはポスという支部単位の規定は設けられていない。また，ガルドの設立は中央執行部への申請・承認を通して行われるが，ポスの設立は地域支部の承認までしか必要としないため，中央執行部ではその実数を把握していない（FBR 代表他へのインタビュー，2013 年 3 月，於 FBR 本部事務所）。

23) 組織の構造・活動の両面でイスラーム色が顕著にみられるが，中央執行部は，FBR がイスラームの教えと合致するもののみを許容する宗教組織ではなく，いかなる信仰をもつ個人にも開かれた社会組織であることを強調する。FBR の組織原則・細則には，プタウィの伝統文化を象徴するオンデル・オンデル（*ondel-ondel*）と呼ばれる魔除け人形を組織のシンボルとする旨が明記されているが，その理由も，それが宗教的意味合いを喚起しにくいものだからだという（付録 1: 5 章；付録 2: 1 章）。ただし実際に成員の大半はムスリムなので，非ムスリムの存在は目立たない。

らず、各地域の活動における実際上の統率は支部に大きく委ねられている。そのため組織全体としての統率は脆弱なものとなっている。

支部の自律性は活動資金の流れや会計の仕組みにもあらわれている。組織原則・細則の会計・資金に関する規定によると、組織の財源は会員からの入会金と月々の会費、<sup>24)</sup> 会員・非会員からの任意の資金提供、そして組織の業務から得られる収益から成るとされている（付録1: 8章；付録2: 8章）。中央本部でのインタビューで資金の流れに関して尋ねたところ、中央執行部の活動は原則独立採算で、行政や統括組織バムス・ブタウィ（脚注8参照）から定期的な資金援助はないという。ただし、州政府やバムス・ブタウィ主催のイベントの際などに不定期に資金が流れることはある。<sup>25)</sup>



図1 FBRの組織構成（2013年当時）

出所：筆者作成。

24) 入会金に関しては、FBR細則に15,000ルピア（約100～150円）との規定がある（付録2: 3章）。月々の会費額に関しては、文面による規定はない。

25) FBRの会員には定職に就きながら組織活動に参加している者も多く、集会・イベント時の経費も、組織の活動によって得られる資金の外には基本的に会員の持ち寄りや外部からの寄付で賄われる。例えば、中央執行部レベル、支部レベルで開催される集会用設備や、集会中に振る舞われる飲食物の費用がこれにあたる。他にも、ガルドごとに制作される、ロゴとガルドの番号がプリントされたユニフォーム（シャツや帽子など）の費用も、各ガルド会員の自前の資金で賄われ、その制作も各自で自主的に行われる。

## II-2 新しいポピュリズムとFBRの動員

FBR 中央指導部の対外イメージ戦略は2010年頃を境にその方針を転換したが、この流れは、同時期にジャカルタを中心に大衆からの支持を獲得し始めた新しいポピュリズムの流行と軌を一にしている。この頃を境にFBRの大衆アピール戦略は、競合勢力への敵対姿勢を強調する手法から、明確な敵対姿勢の表明を避けるとともに実務上の成果を強調する手法へと移行した。以下では、この方針転換が、敵対的ポピュリズムに代わって非好戦的で実務型のポピュリズムが大衆の支持を得るようになっていくジャカルタの政治状況と連動していることを説明する。

民主化期のインドネシアにおける政治のポピュリズム化に注目する議論は、「選挙ポピュリズム」(electoral populism)が確立したことの意義を強調してきた [Aspinall 2013: 103]。<sup>26)</sup> 地方首長の選出にも直接選挙制が導入された2005年以降の政治状況を象徴するのが、中部ジャワ州のソロ市長からジャカルタ州知事、そして大統領にまで上り詰めたジョコウィ (脚注6参照) である。2014年大統領選挙で彼の対抗馬として出馬し敗れたプラボウォ・スビアント (Prabowo Subianto) が採用した「敵対的ポピュリズム」(confrontational populism)<sup>27)</sup> に対して、ジョコウィが採用したのは、敵対姿勢の表明をできる限り避けて包摂的な姿勢を強調するとともに、合理的再分配政策の着実な遂行をアピールする「非好戦的で実務型のポピュリズム」(nonbelligerent, technocratic populism) だった [Mietzner 2015: 4-5]。

そして、ソロ市長時代の実績を背景にしたジョコウィの非好戦的な実務型ポピュリズムが国民的現象となったきっかけが、2012年のジャカルタ州知事選挙だった。<sup>28)</sup> こうした実務型ポピュリズム傾向の高まりは、民主主義の定着と市民意識の成長を示すものとして研究者・観察者からも高く評価されていた [Ikrar 2013]。2012年選挙ではエスニシティによって候補者を選

26) 2005年以降に地方での暴力的紛争が沈静化し、政治的安定が達成された状況を受けて、インドネシアは、非西欧諸国における民主主義の定着度合いに注目する研究者から、2000年代に権威主義への反動が世界的傾向となる中では「驚くべき政治的成功例」(a surprising political success story) と評され、民主制度移行を安定的に達成した事例として称揚された [Diamond 2010: 23]。一方で、インドネシア政治研究における寡頭制支配 (oligarchy) の議論では、体制崩壊後の制度改革が寡頭制支配の廃絶を伴わなかった点が強調されてきた [Ford and Pepinsky 2014: 2-6; Robison and Hadiz 2004; Winters 2011]。旧体制からの分配構造の大枠が根本的崩壊に陥らなかったことこそが既得権益層が急速な制度改革を許容した最大の要因であり、民主制の定着と寡頭制の温存という2つの矛盾する要因が相互に補強し合う力学がそこには働いている [Aspinall 2010: 32; 本名 2013: 201]。しかし、E. アスピノールが強調するように、制度面での改革が安定的に達成されたことの意味は大きい。

27) 自身を既存の政治権力構造の外部者として提示した上で政党政治の腐敗を糾弾し、「搾取的な富裕層と外国資本」への対決姿勢を前面に押し出すことでナショナリズムを喚起して低所得層住民の支持を得ようとするプラボウォの戦略は、ベネズエラのチャベスやタイのタクシンなどの例に倣った「古典的で権威主義的なポピュリズム」と呼べるものだった [Aspinall 2015: 1; Mietzner 2015: 17-23]。

28) 直接選挙制度の導入とマスメディア市場の自由化を背景として、2012年以降のジョコウィ的ポピュリズムへの大衆の支持は、選挙の得票数および主流メディアの視聴率・購読数にあらわれた。とりわけ「抜き打ち視察」(blusukan) によって住民との直接対話と行政の合理化とをアピールする姿勢が大衆の大きな支持を得た [Tapsell 2015: 41-45]。

ぶ傾向は低く、政治家個人の政策やイメージによって投票行動が決まる傾向の高まりが見られた。<sup>29)</sup> 非好戦的で実務型のポピュリズムが支持される傾向は、特にジャカルタにおいて顕著にあらわれた。実務と住民対話を重視しているというイメージと、種々の政治勢力やアクターへの対決姿勢を鮮明に打ち出さないというイメージとが、政治アクターへの評価と支持に影響をもつようになった。

この傾向は、特に2000年代後半からFBRのイメージ戦略にも影響を与えるようになった。FBRは設立初期の段階では、貧困層の利益を代弁することを強調する際にエリート層との対決姿勢を押し出すことも辞さなかった。例えば、統括組織バムス・ブタウィ<sup>30)</sup>がブタウィの上流階層の利益を代表しているのであって、労働者層の利益を代表していないという理由でFBRは2003年まで傘下に入ることを拒んだことがあった。<sup>31)</sup>「エリート層」対「貧困層」という集団区分のイメージは、FBRの動員理念に言説としてあらわれるだけでなく、動員される側の人々の日常意識にも浸透している。市内中心部出身の都心部ブタウィのうち、植民地期から西洋式教育を受け、官僚を輩出してきた家柄のエリート層と、代々周辺部出身の教育程度、所得ともに低い村落部ブタウィとを区別する意識が、ブタウィ内の2大集団区分として現在まで広く認知されている(II-1参照)。このように一般に広く浸透した認識が、バムス・ブタウィに対して精神的に距離をとる要因の一つとなっていると考えられる。<sup>32)</sup>

一方、2000年代後半以降は、外部のアクターに対して敵対姿勢を示すことを自制する傾向が高まっている。2013年に現代表であるルトフィにこの統括組織への支持に関して尋ねた際、現在は公式に支持しているが、無条件で支持している訳ではないと語ったが、彼はその理由とし

29) 2012年ジャカルタ州知事選挙(脚注6参照)における区ごとの宗教・エスニシティ別人口比率と投票行動の相関を分析したワヒュと見市の考察によれば、ブタウィの人口比率の高さとムスリムの人口比率の高さがフォケ・ナラベアの得票数と正の相関を示した[Miichi 2014: 70; Wahyu 2014: 39]。しかし、決選投票の出口調査での投票理由に関する質問に対して、「政策」と答えた有権者は、フォケ・ナラベアに投票した者のうち31.7%、ジョコウィ・アホックベアで31.9%、「民衆の利益を優先するから」と答えた者がそれぞれ9.2%、32.7%、「宗教が同じだから」と答えた者が25.9%、0.5%であったのに対して、「エスニシティが同じだから」と答えた者はそれぞれ4.6%、4.9%しかいなかった[Miichi 2014: 76]。加えて、選挙戦終盤には両候補ともに宗教指導者とのコネクションを重視した選挙キャンペーンを展開した[ibid.: 75-79]。こうしたことも考慮に入れると、ブタウィ人の多数が宗教的側面を重視して投票したために表面上は相関が見られたが、実質的にはエスニシティへの帰属意識は投票行動に直接的な影響を及ぼさなかったと考えられる。

30) 脚注8参照。2003年当時の議長は当時ジャカルタ州副知事のフォケ(脚注6参照)だった。

31) FBRがその傘下に入ったのは、当時代表であったファドロリに副議長のポストが約束されてからだった[I. D. Wilson 2015: 108-109]。

32) 例えば東ジャカルタ支部のあるガルド代表は、2012年ジャカルタ州知事選(脚注6参照)に現職として出馬したブタウィ人候補フォケへの支持について尋ねられた際、彼が植民地支配下の1940年代から西洋式の高等教育を受ける者を輩出してきた家柄であることに言及し、バムス・ブタウィで指導的な位置を占めるのはこうした階層の人々であり、ブタウィ内のエリート層の利害を代表しているということが、この統括組織を無条件には支持しない理由であると語った(当該ガルド代表へのインタビュー、2013年2月、於東ジャカルタ)。

て、「バムス・ブタウィはジャカルタ大都市圏全域ではなく、ジャカルタ州のみを対象とする組織である」と述べるにとどめた。<sup>33)</sup> FBRの動員は貧困層住民の支持を希求するものである。それにもかかわらず、住民の生活意識に浸透した「都心部対周辺部」という二項対立をレトリックとして利用し、「エリート対貧困層」の対立を喚起することを避け、エリート層に対する敵対姿勢の明言を避ける意識が見てとれる。

こうした方針転換への中央指導部の意識は、現代表のルトフィによる以下の発言にもあらわれている。彼は新聞の取材に対し以下のように述べた。

地域内にもっと強い組織がどんどん増えていくにつれて、FBRも含めたこれらのギャング〔組織〕は、仕事を「より適切に」遂行することで不必要な争いを避けざるを得なくなる。なぜなら、こうした組織の活動は今や、〔社会的影響力が〕強く、よく組織化されたジャカルタ先住者からの注目に晒されているからだ。[*Jakarta Post* 2011/12/17]

FBRの中央指導部は、外部社会に対して表向きには反社会的でないことを強調し、組織内部に根強く残るプレマン性（＝収奪者としての性格）を排除する意志を表明するプレッシャーを感じている。外部との「争いを避ける」非好戦的な姿勢を示し、「仕事を『より適切に』遂行」という実務的側面を強調しなければならない。ジャカルタ地方政治のポピュリズム化の空気の中では、大規模な大衆組織がこうした外部からの評価を無視して活動を続けることは難しい。

2000年代後半以降、FBR中央執行部が非好戦的で実務型のポピュリズムに方針転換したことで、縄張り争いは組織活動の中で重要性を失っていった。組織活動の重点は「企業を恐喝することから、失業中のブタウィの若者を警備員として派遣することへと移行」し、貧困層住民に社会福祉機能を提供するという実務上の成果を喧伝することに重点を置く方針へと転換した[*Jakarta Post* 2009/8/28a]。この方針転換の結果、投票行動におけるような直接的政治動員と地域ごとの草の根的に構築される直接的統制のいずれにも重点を置かなくなったにもかかわらず政治アクターの支持を取りつけることができたのは、単にそのようなイメージを強化して提示する能力によってである。

### III エスニシティを資源とした大衆組織の可能性と限界

前章では、FBRのフランチャイズ支部を通じた拡大戦略が成功した要因を、ブタウィに特徴的な集団内多様性の認識という帰属意識のあり方とジャカルタに特徴的な非好戦的ポピュリズ

33) FBR代表へのインタビュー（2013年3月、於FBR本部事務所）。



ムのあり方から説明した。前者は、FBRの組織構成が支部の自主運営に頼る動機づけとなり、後者は、中央執行部の基本方針が支部や末端成員への統制を重視しない動機づけとなっている。こうして、両者の影響は各地域における支部の自律的活動を促進する要因となっている。支部の自律性は別の見方をすれば統制の脆弱性を意味する。本章では、組織中央からの統制の脆弱性をもつ意味を考察するために、動員される側の視点にも注目する。

以下では、動員される側の視点として各地域に散らばる支部や末端成員の組織活動への参与の仕方に注目し、エスニシティを動員原理として標榜する大衆組織の可能性と限界を考察する。規律・統制の低下により収奪的な活動が容易になる地区が出てくる一方で、自律性の増大に伴って住民主体の方向性をとる支部も出てきた。これらの傾向は両者ともに、組織構造の周縁において最も極端にあらわれる。末端支部の視点に立つことで、組織活動のこうした両義性にかかわらず、なぜ成員が組織に惹きつけられるのかを説明する。

FBRのような組織は、市民社会の統合を阻み、民主主義の定着を妨害する要因と見なされてきた。例えばV. バイティンガー＝リーは、民主化期インドネシアにおける大衆組織を市民的(civil)組織と非市民的(un-civil)組織とに区分し、前者をさらに3種類、後者を4種類に分類している。市民社会的性格の強いものから順に並べると前者は、1) 親民主主義的、改革派で政治変革を助長するもの(社会運動・NGO)、2) 政治的に曖昧で市民社会的な徳と権限移譲を助長するもの(開発NGO・寛容な宗教組織など)、3) 政治的に曖昧で社会資本構築に利する可能性のあるもの(市民団体・職業団体など)、後者は4) 国家／軍に権限を委任されたもの(国家／軍の支援を受けた民兵組織や青年組織)、5) 国家の機能を代替し、国家の脆弱性を補完／利用するもの(自警団・コミュニティ防衛団・市民社会組織の私兵団・政党等の特別部隊[satgas])、6) 自由主義国家に敵対するもの(過激派宗教集団・分離独立運動)、7) 国家およびその法の枠外にあるもの(テロリスト集団・組織犯罪)である[Beitinger-Lee 2009: 117]。FBRは5)に分類され、非市民的組織と位置づけられている[ibid.: 160, 177-178]。

こうした子細な分類を経ない場合でも、観察者や研究者による自警団的組織の位置づけは「プレマン組織」(preman organization)や「プレマン性」(premanisme)という語の使用にあらわれている。これらの用語で組織を説明する場合、生活者を搾取する収奪者としての側面に焦点をあて、民主化の定着と市民社会の醸成を妨げるものという位置づけがなされる。エスニシティを動員原理として標榜する自警団的組織が市民社会を蝕む勢力として位置づけられてきた大きな理由は、この種の組織が活動において、屋台商人などのインフォーマルセクターで生計を立てる貧困層から社会経済的資源を搾取するとともに、政治家などの既得権益層とパトローネージ関係を取り結ぶことで金権政治の温床となってきたことにある。

こうした大衆組織は、特にその発展の初期段階において、権力者からの支持を得る見返りに暴動や破壊活動を行う集団として描かれてきた[Brown and Wilson 2007; Untung 2006; I. D.

Wilson 2006; 2008]。この種の分析は、フォーマルな政治アクターとインフォーマルな暴力集団との政治的提携を見る際にパトロン＝クライアント構造を強調する一方、組織動員のあり方が急速にポピュリズム化してきたことを明らかにしてこなかった。そのため、なぜこれらの組織が多数の成員を獲得することができたのかを説明してこなかったのである。

プレマンはオランダ語で自由民を意味するフリーマン (*vrijman*) を語源とし、現在では地域におけるならず者・チンピラや、不法行為に関わる人物を指す語として一般に使われる。<sup>34)</sup> ジャカルタにおいてしばしばこれと対比的に使われる語が、近隣地域をまとめる有力者を指すジャワラ (*jawara*) である。この2つの語彙は、2種類の異なる人々を分類する区分ではない。そもそも、自身の近隣コミュニティ内の人々からは「徳のある庇護者でありカリスマ性をもつ指導者」とみなされる人物が、別の人々からは「情け容赦ない搾取主体であり無法者」とみなされる状況はしばしば起こりうるからである [Brown and Wilson 2007: 373]。ジャワラとプレマンの対比は、日常生活で頻繁に語られる。両者が混同された場面ではしばしば、ジャワラはコミュニティ内での問題を仲裁して解決できる能力をもった人物であり、人々を暴力で脅して搾取するプレマンとは違う、といった訂正がなされる。<sup>35)</sup> こうした指摘は多くの場合、分類区分のためにではなく、その場面で話題に挙がっている特定の人物で、親密な間柄の人物の性格を、収奪者・無法者としてのプレマンから明確に線引きするために行われる。

日常から繰り返し語られ広く共有された「ジャワラ／プレマン」という一対の概念セットは、中央本部から地域支部・小規模支部に至るまでの活動における語りの場面で、組織活動の正当性を主張する際に効果的な概念として繰り返し使用される。<sup>36)</sup> 日常の生活意識に根ざした互いに対となる概念が組織の活動において繰り返し強調される、あるいはその必要性が強く意識されるという状況は、この種の組織の二面性を端的に表している。「プレマン組織」が2つの相矛盾する性格を抱えており、生活者にとって収奪者(＝プレマン)になるか庇護者(＝ジャワラ)になるかの間を揺れ動くのであれば、そしてその揺れが外部社会からの拘束に大きく左右されるのであれば、組織の活動の考察においてはこの両面に等しく注目する必要がある。なぜなら、収奪的側面のみに注目する視点からは、組織が動員される側の末端成員から広範な支持を集める要因を説明できないからである。

34) 歴史的背景については Cribb [1991], Ryter [1998: 48–57], Untung [2006] を参照のこと。

35) 同種の文脈でジャワラがジャゴ (*jago*, 腕っ節の強い人) と対比されることも多い。

36) 用語法には地域差もある。例えば都心部プタウィ (II-1 参照) の間では同様の対比がかつてジャゴ／ジャゴアン (*jagoan*)、白のジャゴ (*jago putih*)／黒のジャゴ (*jago item*)、あるいは敬虔なジャゴ (*jago alim*)／邪悪なジャゴ (*jago bengal*) の使い分けで表されていたという [Untung 2006: 27–28]。一方で、隣接するバンテン地域ではジャワラという言葉自体に否定的含意があり、組織名称への使用が避けられるほどだった [岡本 2005: 11]。用語法の変遷は不明確だが、本稿の文脈で重要なのは、少なくともジャカルタ近郊ではこの種の二項対立が日常会話で頻繁に修辞として用いられ、一般に馴染みのある概念となっていることである。

### III-1 統制の脆弱性と末端の自律性

ブタウィの帰属意識とジャカルタのポピュリズム化を背景としてFBRがフランチャイズ的拡大戦略を採用したことは、支部の自律性を高める要因となった。支部の指導部の人員は中央から派遣されるのではなく、各々の地域の地元在住の成員から選ばれた地元民がその任に就く。各支部の成員はそのほとんどが地元出身の人間で、外から来た者が加入する場合でも、当該地域に長く居住し、先住者と緊密な社会関係を築いている場合が多い。そのため、各地域に根ざした帰属意識や人間関係は組織構成の中に温存されたまま、その上から、全ジャカルタ大都市圏を包括する組織の動員原理が同地域の先住者全体を包括する抽象的枠組みである「ブタウィ」と対応するかたちで覆いかぶさり、一般化した組織の動員原理に基礎を与えている。

中央本部の人間と近隣地域における個人的人間関係を組織加入以前からもっていたチャクン周辺の成員を除けば、他地域の支部の幹部・成員は、組織加入後初めて本部の人間と知り合った者が多く、加入のきっかけは近隣地域の友人・知人に誘われたという場合が多い。地域支部からガルドに至るまで、代表および指導部役員に選ばれるのは地元に住居する者、特に何世代も当該地域に暮らし、そこに生まれ育った者である場合が多い。

FBRの成立以前から本部の人間と関係をもっていた一部の成員は別として、支部の人々は幹部や成員であっても加入前は組織に対してよいイメージをもっていなかった人も多い。こうした人々は、親しい友人や古くからの知人に誘われたのち、中央本部や地域支部に赴いて組織の方針や規則等について説明を受け、賛同して初めて加入を決めたと語る。例えばタンゲラン市の地域支部代表は、テレビをはじめとしたメディアで取り上げられるFBRのイメージが暴力的でまさに「ブレマン組織」のそれであったために、組織加入以前はFBRが嫌いで、激しい怒り（*dongkol*）を抱いていたとさえ述べた。それでも彼が組織に参加したのは、地域の古い知人に誘われたことと、組織の人間からの説明を受けた際に、その活動方針や理念に共感できたからだという。<sup>37)</sup>

このように、支部の成員と本部の成員とは、親密な人間関係というよりは、公的領域における人間関係によって繋がっている。つまり、集落への帰属意識を基礎とした近隣地域の私的関係によって結ばれているのではなく、大規模組織の機構と活動を介したフォーマルな次元の交流によって繋がっている。支部から本部への支持は同じエスニシティに属することを理由として無条件になされるのではなく、公的な関係性の中で理性的になされる側面が強い。

前章では、中央執行部の視点から組織規約や枠組みに注目し、全体的な組織構成や資金の流れが支部の自律的活動を許容あるいは促進していることを確認した（II-1 参照）。一方で、支部や末端成員の視点から中央と支部との関係を考察すれば、両者の関係が私的で情緒的な結び

37) タンゲラン市地域支部代表へのインタビュー（2013年8月12日、於タンゲラン市）。

つきによっていないということも、中央から支部への統制を脆弱にしている要因であることが明らかとなる。例えば、南ジャカルタのあるガルド代表は、本部代表のルトフィが地方選出議員に立候補するがこれを支持するかという話題になった際、彼がもし本当に下層の住民を気にかけていて、小さな地域まで降りてきて直接民衆に会い、対話をもとうとするならば支持するが、そうした意志がなく、下層の民衆のことを気にかけていないと感じられたならば支持しないと述べた。<sup>38)</sup> これは、投票行動における支持の浮動性のみならず、組織活動一般において中央執行部が各支部や末端の成員、さらには組織を取り巻く非成員の意志や希望と根本的に反する態度や方針をとればその支持を容易に失いうる可能性を示唆している。

支部に対する規律の脆弱性と支持の可変性は、現代表が「FBR というと全て同じものだということに見られるが、地域支部やガルドごとに別々の組織なんだ。[……] その末端まで中央が統制を加えることは難しい」と吐露するように、本部においてもはっきりと認識されている。<sup>39)</sup> FBR 内部での中央執行部と下部組織との関係は上意下達統制とは程遠い緩やかなものであり、各支部が運営・活動において裁量を大幅に委ねられ、高い自律性をもって活動していることが窺える。

統制と忠誠の脆弱性は、動員の具体的場面でも指摘されてきた。ディアティカは、組織からデモ参加の要請があった際、金銭支給の有無によって参加を決める FBR 成員の語りを取り上げている。その成員は、金銭の支給が無ければデモ参加に意味はないと言いきる [Diatyka 2017: 39]。著者の調査では、組織への参加によって得られる利益に対して、組織から何らの見返りも期待されない事例すらあった。南ジャカルタのある男性は、ガルド代表となったことで地元行政との繋がりを得て、これと連携するようになった。それ以降彼は、行政が提供する職（警備員や駐車場係員など大方が低収入の職）に無職者を紹介する業務に従事している。彼自身、組織に加入しなければこの機会には巡り会えていなかったと考えている。ところが、彼は組織活動に参加しなくなった後も依然この業務に従事している。<sup>40)</sup> 組織の枠組みがあつてこそ可能となった経済機会だったが、一度行政との提携が確立すれば、その関係は個人的信頼に基づいたものとなったようである。

組織への参加によって利用可能となる社会経済的資源であっても、それが単純に組織への貢献や忠誠の見返りであるとは限らない。組織が提供する社会経済的便宜に加えて、そうした便宜の見返りとして組織中央への貢献・忠誠を厳しく要求されないことも、FBR が成員を惹きつける重要な要因であると考えられる。

38) 当該ガルド代表へのインタビュー（2013年8月20日、於タンゲラン市）。

39) FBR 代表へのインタビュー（2013年2月17日、於東ジャカルタ）。

40) 元ガルド代表へのインタビュー（2013年8月20日、於タンゲラン市）。

### III-2 組織末端における活動の両義性

しかし地域支部からガルドに至る自律性の高さ／規律の弱さは、近隣地域レベルでの収奪的慣行を促進する危険性を多分に孕んでいる。支部の活動の自律性が確保されているということは、末端成員の大部分が指導部の方針に反した活動をした場合に統御不能に陥る危険性が高いことをも意味する。実際、単一支部の中で大多数が収奪者の性向を強くもっていた場合、支部の指導部がこれを制御しきれなくなるという事例は少なくない。

南ジャカルタのあるガルド代表は、自分の組織の成員が屋台商人を脅して強制的に金銭を徴収するやり方が厭になって組織の活動に参加しなくなった。<sup>41)</sup> 同じく南ジャカルタの別のガルド代表は、近隣地域のジャワラとしても名の通った自分の名前を支部の成員が濫用する程度があまりに甚だしかったために、厭になって組織の活動に参加しなくなったという。<sup>42)</sup> ガルドへの統制が脆弱であることは、支部内における暴力的活動の統制に失敗した場合には、当該近隣地域内でプレマンたちが組織の名前を用いることで収奪者としての地位をより確固としたものとし、搾取的活動が蔓延する要因となる。これらの事例では、動員される側の成員が、上からの統制を恐れずに組織を利用してより効率的に収奪的活動を行うことができるという点に組織加入の利点を見出しているといえる。

ただ、こうした危険性にもかかわらず、地域に根づいたフランチャイズ的組織構成と規律の脆弱性は、近隣地域において組織が住民と協調した活動を展開する可能性を開きうる。市会議員としても活動する先述のタンゲラン市地域支部代表は、政治活動と組織活動に共通する住民との「対話交流」(*sosialisasi dialog*)の重要性を強調する。加入当時彼の地元ではFBRはまだ馴染みがなかった。テレビやメディアで頻繁に報じられる揉め事を起こしているというイメージもあって非常にネガティブに受け止められており、地元の民衆はあまりFBRを受け入れていなかった。彼自身はじめはFBRに好感をもっていなかったが、組織の人間に会って組織原則・細則を読んだ後、興味を引かれて組織の活動に参加した。彼によれば、時間の経過とともにゆっくりと地元の民衆も組織の存在を受け入れるようになった。彼は以下のように述べ、住民との協調性を重視した活動が住民に肯定的に受容される可能性を強調した。<sup>43)</sup>

ネガティブな見方をしていた民衆が、本当のところ何が起きているのかという情報を与えられれば、その人たちのイメージも変わる。だから、鍵は、その民衆と交流を行うこと、または交流をもてるその場面で、どのようにしてFBRが民衆に受け入れられることができるのかということなんだ。

41) 元ガルド代表へのインタビュー（2014年3月15日、於南ジャカルタ）。

42) 元ガルド代表へのインタビュー（2013年8月20日、於タンゲラン市）。

43) 当該地域支部代表へのインタビュー（2014年3月12日、於タンゲラン市）。



近隣住民に詳細なインタビューを行っていないため、当該地域でFBRの活動が実際にどの程度受容されているのかは定かではない。この点は今後の課題である。しかし上の語りからは、少なくとも支部代表が対話交流を通して住民からの理解を得る必要性を強く意識していることが分かる。<sup>44)</sup>

組織拡大の初期において、特に本部から離れた地域では、住民がFBRに対して非常にネガティブなイメージをもち、そのため支持は薄かった。これは多くの地域において未だに変わらないが、近隣住民から受容され始めている地域もあった。前述のタンゲラン市地域支部では、当初は支部代表自身でさえFBRを極度に嫌っていた状況から、住民との対話交流を通して組織の存在が次第に受け入れられるようになってきている。この支部代表は「ネガティブな面はまだある。我々の仲間でもまだそのような〔暴力や揉め事を起こす〕者もいるが」と断りを入れた上で、宗教の教えやその他のポジティブなイベントを利用すれば、通常は是正可能な事柄だと述べる。<sup>45)</sup>

FBRは「ブタウィ」という、500万の人口と全ジャカルタ大都市圏を包括する極度に抽象的な動員原理に依拠して、そうでなければ関係をもつことのなかった別個の地域の人々を結びつける社会関係を提供する契機ともなっている。タンゲラン市のあるガルドの成員は、スハルト体制期には今ほど「スク」(=民族、脚注17参照)に関心を払わなかったが、今では隣接する地域であるにもかかわらず以前は関係をもつことのなかった西ジャカルタの支部の人々とも交流がもてている、と言って、抽象的な動員原理を基にする組織が近隣地区を超えて社会関係を拡張する契機となったことを説明する。さらに、このガルドでは組織の枠組みが、新興商業施設の運営主体に対して地元の人間を雇用するよう請願する際、FBRの名を用いることで公式な手続きを通してこれを行うことも可能にしたという。<sup>46)</sup> また、同支部の会計係でタンゲラン市地域支部の会計係も兼ねる成員は、片親世帯を支援するイベントなどを通して生活困窮者の手助けをすることを組織活動参加の理由の一つとして挙げ、支部代表は自分の気持ちを理解してくれているから活動に協力したいと思う、と語った。<sup>47)</sup>

組織が提供する社会経済的資源は、人々がFBRの活動に参加する重要な要因だろう。しかし、そうした資源は単に組織への忠誠や貢献の見返りとして与えられるものではない。組織に参加

44) 本稿では動員される側の論理として末端支部の成員に注目してFBRへの支持の要因を考察している。これに加えて、支部を取り巻く近隣地域住民からの視点はFBRが一般社会に受容された要因を説明するためには重要な点であるが、分析の射程に入れることはできなかった。今後の課題としたい。

45) この会話中では、地域の片親世帯の子供を支援するためのイベント(*santuan anak yatim*)が例として挙げられた。彼が「ポジティブなイベント」と言った際、宗教関連のものを含む地域活動を通じた慈善事業を念頭に置いていたと思われる。タンゲラン市地域支部でのインタビュー(2014年3月12日、於タンゲラン市)。

46) 当該ガルドでのインタビュー(2014年2月28日、於タンゲラン市)。

47) 成員へのインタビュー(2014年3月1日、於タンゲラン市)。

することによってのみ利用可能となる資源を成員が自分の手元に保持し続けたいと望む場合であっても、組織への貢献や、場合によっては忠誠でさえも、保ち続ける必要はないのである。支部レベルの活動における自律性の増大と忠誠の流動化は、そのどちらもが、FBRという組織のポピュリスト的動員原理の根幹を成す要素である。この両者は、組織がフォーマルな政治アクターの後援に加えて中下層の住民の支持を数十万単位で獲得した要因として重要なものだろう。動員される側の視点から見れば、組織の活動を通して下層の人々の利益を増進するという目的が現時点でどの程度達成されているかは別にしても、人々の生活世界を豊かにする活動を志向するアクターが支部内に一定数おり、それらのアクターが、大衆組織の枠組みを各々の目的達成のために利用可能な社会資源として認識するからこそ、FBRは広範な大衆を惹きつけるのである。

### III-3 エスニシティが排他性に転じる危険性

本章ではエスニシティを資源とした動員の可能性と限界を考察してきた。しかし、これを動員する側ではなく動員される側の論理によって理解しようとする以上、本源的な感情が社会的亀裂や排除に結びつく危険性と、それが回避される可能性を考察する必要がある。近隣地域での生活感覚に根ざした集団境界の認識に着目した場合、特に生活空間が明確に分断されている場合には生活上の集団的差異の認識が排除の意識に転じやすい。プタウィを中心とした住民が暮らす昔からの都市集落とマドゥラ人に代表される都市移民が暮らす不法居住区との地理的分断に特徴づけられた東ジャカルタ・チャクン地域は、その典型である。II-1で見たような居住区の分断を基礎とする集団帰属意識の分断は日常意識に留まらず、それが動員原理と結びつけられ繰り返し語られることで、組織化された活動においても表出する。これは「マドゥラの脅威に対して立ち上がる」というチャクン地域に根ざした動員原理に、さらには、こうした語りが日常における生活世界の分断意識とともに人々によって語られ続けることで現在まで継続していることに示されている（脚注16参照）。

日常意識に根ざした社会的帰属の分断は、一般化され、強化されうる。2002年にインフォーマルセクター従事者が州政府に対して待遇改善のデモを行った際、この運動を支援していたアーバン・プア・コンソーシアム（Urban Poor Consosium: UPC）事務所をFBRが襲撃するという事件があった。<sup>48)</sup>あるFBR成員は、この事件を10年以上後から振り返り、以下のように述べた。

48) 2002年3月、UPCが州政府の強制退去政策などに反対して国家人権委員会（komisi nasional hak asasi manusia: Komnas HAM）前でデモを行った際、約200人のFBR成員がこれを襲撃し、デモ参加者に十数人の負傷者が出た事件 [Liputan6 2002/3/29a]。スティヨソ州知事（当時）の関与も疑われ、知事が公式に関与を否定する事態になった [Liputan6 2002/3/29b]。

ジャカルタの人というのは、貧しくなってもそんな風に傲慢にはならないものだ。つまりは、貧しくても、自分が貧しいということを喧伝したりはしないのだ。[……]「ジャカルタの住人」と称した人々は、実は違う地域からの移民 (*imigrasi*) だった。<sup>49)</sup>

現実の生活上の社会関係は先住者や外来者というカテゴリーで単純に分断できるものではないにもかかわらず、表象と認知の次元における単純な二分法的修辭の反復によって、人々は実感としての二項対立を繰り返し経験する。ここでは典型的に「先住者」か「外来者」かという二項対立を軸として「慎ましさ」か「粗暴さ」か、あるいは「謙虚さ」か「図々しさ」か、といった倫理観・礼節に関わる価値基準の二項対立が提示され、その二分法が、個別場面での表象においては、ジャカルタという都市空間の全居住者を分節する原理として提示されている。この事件当時に表出した集団意識の排他性もさることながら、前述のFBR 成員の振り返りにみるように、この出来事に対する日常意識レベルでの意味づけとその反復にも、エスニシティを基盤とした集団意識がいかに排他的なものに転じる危険性をもつかが示されている。

しかしながら、FBR が非好戦的で実務型のポピュリズムの方針を変えない限り、少なくとも中央執行部のレベルで排他的・敵対的アジェンダを積極的に喧伝する傾向は低下していくだろう。とはいえ、フランチャイズ的組織構成によって支部の自律性が高くなっている以上、エスニシティの亀裂を煽る形での対立・衝突が小規模支部レベルで生じる危険性は残る。日常レベルでのエスニシティを取り巻く対立を回避する可能性を本稿で詳細に論じることにはできないが、FBR の動員形態に排除・敵対を回避する可能性がみられることは指摘しておきたい。

FBR は、エスニシティの属性がその動員原理の中心を占めるにもかかわらず、実際の動員においては自身をブタウィでないと認識する人々をも許容する局面が頻繁にみられる。これは、ブタウィの帰属意識の根幹を成す、集落の意識を基礎とした近隣地域の人間関係に依拠して支部レベルの動員が行われていることと関係している。ブタウィ性を標榜するFBR の組織動員が異なる属性をもつ人々を容易に取り込むのは、支部における日常的活動と動員が近隣地域での人間関係と連続性をもつからである。つまり、外来住民であっても、同一近隣地区の住民として生活を長く共にした者であれば、そもそも日常生活意識において地域コミュニティの一員とみなされているからである [中村 2019: 26-27]。このことは少なくとも、日常生活における社会関係の構築が社会的亀裂・対立を緩和する回路となりうる可能性、および、それがエスニシティを資源とする大衆動員にも容易に転化される可能性を示している。

49) 成員へのインタビュー (2013 年 11 月 30 日、於東ジャカルタ)。

## おわりに

以上、本稿は、1998年の権威主義体制崩壊から2010年頃までの、ジャカルタという地方の状況に注目して、民族に関わる大衆動員の動向を考察した。ジャカルタの大衆動員の文脈では、州単位の地域性と結びつけて規定されてきた民族（＝スク・パンサ、脚注17参照）の概念と宗教的な集団帰属とが峻別される傾向があったという事情から、同時期に活発化した宗教に関わる大衆動員の動向は考察の射程に含めることができなかった。<sup>50)</sup>しかし、地域性と結びつけて理解されやすい民族の集団意識に注目したことで、ジャカルタという地域に特有の経緯に即した説明が容易になったともいえる。加えて、動員に応じる側の論理にも着目したことで、インドネシアのエスニシティを資源とした大衆動員の動向は、地域に固有の経緯を踏まえなければ十分に理解できないという論点を提示することができた。

民主化期インドネシアにおけるエスニシティ原理の政治的発露という社会状況を説明した研究のうち暴力に注目するものには、動員者の動向に分析の焦点を置く傾向が見られた。この時期のプタウィの民族組織に関する研究にも、暴力や違法性への関心から自警団的組織に着目するものが多く、動員する側に注目する傾向がみられる。この分析視点は往々にして、社会的亀裂・対立の要因を、分析に先立って前提とした集団境界に帰結させる危険を孕む。加えて、運動の動員者や組織の指導層の動向のみに着目する視点からは、動員対象となる大衆の生活世界に注目する発想は出てこない。これを踏まえて本稿は、組織中央だけでなく末端支部の成員にも注目することで、動員される側の視点も強調した。

設立当初は近隣地域を地盤とする自警団の色合いが強かったFBRは、拡大とともに急速に「全ジャカルタ大都市圏」(*se-Jabodetabek*)を包括する「プタウィ性」(*ke-Betawi-an*)という抽象化された原理に依拠した動員の呼びかけを行うようになった。プタウィの帰属意識の特性と非好戦的で実務型のポピュリズムの浸透とを背景として、FBRは2010年頃までに、末端の自律性と中央への忠誠の流動性とを根幹とする「フランチャイズ支部のネットワーク」を通した動員形態を確立した [I. D. Wilson 2015: 120]。その結果、成員からの実質的忠誠を希求する代

50) この間、民族に関わる大衆動員の動向とは対照的に、宗教、特にイスラームに関わるポピュリスト的な大衆動員は以前にも増して強く政治性を帯びるようになった。FBRと類似の自警団的活動から派生し、宗教的帰属を前面に押し出した動員で大規模化した組織としては、イスラーム擁護戦線 (Front Pembela Islam: FPI) がある [I. D. Wilson 2006: 282–289; 2008; 2014]。ジャカルタをはじめとした都市部で、明確なメンバーシップを設定せずに数万人単位のムスリムを動員する集会が盛んとなった背景、および、FPIをはじめとする保守派・過激派勢力が、大衆の支持を喧伝する目的でそうした集会を政治利用するに至った経緯については、見市の論考 [見市 2018a: 40–42; 2018b; Miichi 2019] に詳しい。また、イスラーム主義組織や、保守派・過激派団体が社会的影響力を増す中で、ジョコウィ大統領が「権威主義的手段」(*authoritarian measures*)を用いてこれらの勢力に対応しているとの批判が起こったことも、この間の宗教をとりまく政治状況の展開として重要なものだった [Aspinall and Mietzner 2019; Mietzner 2018; Power 2018]。

わりに、大衆からの支持を印象づけることが組織の主要関心事となった。中央指導部がどれだけ政治アクターの関心を惹きつけるかは、選挙で動員する票の数ではなく大衆から支持されているというイメージを喧伝できる程度によるのであり、組織構造の末端でどれだけ成員の関心を惹きつけるかは、支持や忠誠を要求することなく社会経済的資源を提供できる程度によるのである。この方針転換は、プタウィ人の集団観念のあり方と、ジャカルタ地方政治の状況を反映していた。

末端の構成員からの視点に注目するのは、暴力的活動や非合法的活動を背景として発展した自警団的な大衆組織に未だ根強く蔓延るプレマン性——生活者から搾取する収奪者としての側面——を矮小化したり隠蔽したりする意図からではない。FBRの動員形態が、動員される側の組織末端において、最悪の状態に転じる危険性と良い方向に転じる可能性の両方をもつことを論じるためである。支部や成員が近隣住民から社会経済的資源を搾取する収奪者としての地位を確立することを容易にする危険性を孕む一方で、近隣地域における生活環境の改善を強く志向する成員にとっては、組織の枠組みが目的達成のための資源となりうる可能性を高めていた。このことは、複雑多様な都市空間においては、自警団的活動から派生したエスニシティ組織もまた生活世界との連続性を背景とした具体的局面で人々の生活の脆弱さを軽減するための回路の一つとなりうることを示している。

本稿では、エスニシティを資源とした動員を考察するにあたって動員される側の視点を強調するために、組織の周縁に位置する支部や成員の視点に注目した。しかし、組織末端における支部の活動が住民の生活の中で実際にどのような役割を果たしているかを明らかにするためには、支部を取り巻く近隣住民の視点からの考察も重要となる。さらに、FBR指導部が外部社会から受容される点を強調していることも考慮すれば、組織全体の動向を考える上でもこの点は重要である。この点は今後の課題としたい。

## 謝 辞

本稿は、科学研究費補助金・特別研究員奨励費（課題番号：12J03013）の助成による研究成果の一部である。記して謝意を表す。

Penulis mengucapkan terima kasih, terutama kepada almarhum Bapak Solihin. Ucapan terima kasih saya sampaikan pula kepada seluruh pihak yang telah memberikan perhatian dan dukungan dalam melaksanakan kajian ini.

## 引用文献

- Aspinall, Edward. 2010. The Irony of Success. *Journal of Democracy* 21(2): 20–34.  
———. 2011. Democratization and Ethnic Politics in Indonesia: Nine Theses. *Journal of East Asian Studies* 11(2): 289–319.  
———. 2013. Popular Agency and Interests in Indonesia's Democratic Transition and Consolidation. *Indonesia* 96: 101–121.



- . 2015 Oligarchic Populism: Prabowo Subianto's Challenge to Indonesian Democracy. *Indonesia* 99: 1–28.
- Aspinall, Edward; and Mietzner, Marcus. 2019. Southeast Asia's Troubling Elections: Nondemocratic Pluralism in Indonesia. *Journal of Democracy* 30(4): 104–118.
- Barker, Joshua. 1998. State of Fear: Controlling the Criminal Contagion in Suharto's New Order. *Indonesia* 66: 7–42.
- . 2009. *Negara Beling*: Street-level Authority in an Indonesian Slum. In *State of Authority: The State in Society in Indonesia*, edited by Gerry van Klinken and Joshua Barker, pp. 47–72. Ithaca: Cornell Southeast Asia Program Publications.
- Beitinger-Lee, Verena. 2009. *(Un) Civil Society and Political Change in Indonesia: A Contested Arena*. London and New York: Routledge.
- Berenschot, Ward; and Vel, Jacqueline. 2017. New Law, New Villages? *Inside Indonesia* 128. URL: <https://www.insideindonesia.org/new-law-new-villages> (最終アクセス 2020 年 11 月 7 日).
- Bertrand, Jacques. 2002. Legacies of the Authoritarian Past: Religious Violence in Indonesia's Moluccan Islands. *Pacific Affairs* 75(1): 57–85.
- . 2004. *Nationalism and Ethnic Conflict in Indonesia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2008. Ethnic Conflicts in Indonesia: National Models, Critical Junctures, and the Timing of Violence. *Journal of East Asian Studies* 8(3): 425–449.
- Brown, David; and Wilson, Ian Douglas. 2007. Ethnicized Violence in Indonesia: Where Criminals and Fanatics Meet. *Nationalism and Ethnic Politics* 13: 367–403.
- Brubaker, Rogers. 2004. *Ethnicity without Groups*. Cambridge: Harvard University Press.
- Budianta, Melani. 2002. In the Margin of the Capital: From 'Tjerita Boedjang Bingoeng' to 'Si Doel anak sekolahan'. In *Clearing a Space: Postcolonial Readings of Modern Indonesian Literature*, edited by Keith Foulcher and Tony Day, pp. 237–271. Leiden: KITLV Press.
- Castles, Lance. 1967. The Ethnic Profile of Djakarta. *Indonesia* 3: 153–204.
- Chaer, Abdul. 1976. *Kamus Dialek Jakarta*. Jakarta: Nusa Indah.
- Colombijn, Freek; and Coté, Joost. 2015. *Cars, Conduits, and Kampongs: The Modernization of the Indonesian City, 1920–1960*. Leiden: Brill.
- Cribb, Robert. 1991. *Gangsters and Revolutionaries: The Jakarta People's Militia and the Indonesian Revolution 1945–1949*. Sydney: Allen & Unwin.
- Davidson, Jamie S.; and Henley, David, eds. 2007. *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: The Deployment of Adat from Colonialism to Indigenism*. London and New York: Routledge.
- Diamond, Larry. 2010. Indonesia's Place in Global Democracy. In *Problems of Democratisation in Indonesia: Elections, Institutions and Society*, edited by Edward Aspinall and Marcus Mietzner, pp. 21–49. Singapore: ISEAS Publishing.
- Diatyka Widya Permata Yasih. 2017. Jakarta's Precarious Workers: Are they a "New Dangerous Class"? *Journal of Contemporary Asia* 47(1): 27–45.
- Firman, Tommy. 2004. New Town Development in Jakarta Metropolitan Region: A Perspective of Spatial Segregation. *Habitat International* 28(3): 349–368.
- Ford, Michele; and Pepinsky, Thomas B., eds. 2014. *Beyond Oligarchy: Wealth, Power, and Contemporary Indonesian Politics*. Ithaca: Cornell University Press.
- Fox, Jon E.; and Miller-Idriss, Cynthia. 2008. Everyday Nationhood. *Ethnicities* 8(4): 536–576.
- Geertz, Clifford. 1963. The Integrative Revolution: Primordial Sentiments and Civil Politics in the New States. In *Old Societies and New States: The Quest for Modernity in Asia and Africa*, edited by Clifford Geertz, pp. 105–157. New York: The Free Press of Glencoe.
- 本名 純. 2013. 『民主化のパラドックス——インドネシアにみるアジア政治の深層』東京：岩波書店.
- Ikrar Nusa Bhakti. 2013. Learning from the Jakarta Local Election 2012. Paper Presented at Socio-Political and Economic Reform in Southeast Asia: Assessments and the Way Forward, organized by LIPI, CSEAS, and JSPS Asian Core Program, Jakarta: March 2013.
- Indonesia, BPS (Badan Pusat Statistik). 2000. *Penduduk Indonesia: Hasil Sensus Penduduk Tahun 2000=Population of Indonesia: Results of the 2000 Population Census*. Jakarta: Badan Pusat Statistik.
- Jellinek, Lea. 1991. *The Wheel of Fortune: The History of a Poor Community in Jakarta*. Sydney: Allen & Unwin.

- 鏡味治也（編）. 2012. 『民族大国インドネシア——文化継承とアイデンティティ』東京：木犀社.
- Kanumoyoso, Bondan. 2011. *Beyond the City Wall: Society and Economic Development in the Ommelanden of Batavia, 1684–1740*. Ph.D. Dissertation, Leiden University.
- 加藤 剛. 1990. 「『エスニシティ』の概念の展開」『東南アジアの社会』（講座東南アジア学3）坪内良博（編）, 215–245 ページ所収. 東京：弘文堂.
- van Klinken, Gerry. 2001. The Maluku Wars: Bringing Society Back In. *Indonesia* 71: 1–26.
- . 2007. *Communal Violence and Democratization in Indonesia: Small Town Wars*. London and New York: Routledge.
- Knörr, Jacqueline. 2010. Contemporary Creoleness; or, The World in Pidginization? *Current Anthropology* 51(6): 731–759.
- . 2014. *Creole Identity in Postcolonial Indonesia*. Oxford: Berghahn Books.
- Leaf, Michael. 1994. Legal Authority in an Extralegal Setting: The Case of Land Rights in Jakarta, Indonesia. *Journal of Planning Education and Research* 14(1): 12–18.
- Leitner, Helgar; and Sheppard, Eric. 2018. From Kampung to Condos? Contested Accumulations through Displacement in Jakarta. *Environmental Planning A: Economy and Space* 50(2): 437–456.
- Mietzner, Marcus. 2015. *Reinventing Asian Populism: Jokowi's Rise, Democracy, and Political Contestation in Indonesia*. Honolulu: East-west Center.
- . 2018. Fighting Illiberalism with Illiberalism: Islamist Populism and Democratic Deconsolidation in Indonesia. *Pacific Affairs* 91(2) 261–282.
- 見市 建. 2018a. 「現代東南アジアの首都圏における宗教と政治——ジャカルタの事例から」『東南アジア政治の比較研究』川村晃一（編）, 35–44 ページ所収. 千葉：アジア経済研究所.
- . 2018b. 「インドネシアのイスラームと政治——『宗教的寛容』のゆくえ」シノドス. 2018 年 7 月 27 日 (<https://synodos.jp/international/21865>, 最終アクセス 2020 年 6 月 25 日).
- Miichi, Ken. 2014. The Role of Religion and Ethnicity in Jakarta's 2012 Gubernatorial Election. *Journal of Current Southeast Asian Affairs* 33(1): 55–83.
- . 2019. Urban Sufi and Politics in Contemporary Indonesia: The Role of *Dhikir* Associations in the Anti-'Ahok' Rallies. *South East Asia Research* 27(3): 225–237.
- Milone, Pauline D. 1966. *Queen City of the East: The Metamorphosis of a Colonial Capital*. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley.
- 中村昇平. 2014. 「ブタウィ・エスニシティの歴史的変遷過程——現代ジャカルタでバタヴィア先住民が示す『異質な他者』への寛容性の起源」『ソシオロジ』59(1): 3–19.
- . 2018. 「都市先住者のエスニシティ——『バタヴィア先住民』ブタウィの集落と帰属意識」京都大学大学院文学研究科博士論文.
- . 2019. 『ムラからカンブンへ——京都郊外の先住者がみたジャカルタ郊外の集落』（ブックレット《アジアを学ぼう》53）東京：風響社.
- Nakamura, Shohei. 2017. Identitas Etnis dan Perasaan Berkelompok Perkampungan Masyarakat Betawi. In *60 Tahun Antropologi Indonesia: Refleksi Kontribusi Antropologi untuk Indonesia*, edited by Achmad Fedyani Saifuddin, Sri Paramita Budhi Utami, Prisinta Wanastri and M. Arief Wicaksono, pp. 392–406. Depok: Pusat Kajian Antropologi, Universitas Indonesia.
- Nawi, G. J. 2016. *Maen Pukulan: Pencak Silat Khas Betawi*. Jakarta: Yayasan Pustaka Obor Indonesia.
- 岡本正明. 2005. 「インドネシアにおける地方政治の活性化と州「総督」の誕生——バンテン地方の政治：1998–2003」『東南アジア研究』43(1): 3–25.
- . 2015. 『暴力と適応の政治学——インドネシア民主化と地方政治の安定』京都：京都大学学術出版会.
- Okamoto Masaaki; and Hamid, Abdul. 2008. Jawara in Power, 1999–2007. *Indonesia* 86: 109–138.
- Okamoto Masaaki; and Rozaki, Abdur, eds. 2006. *Kelompok Kekerasan dan Bos Lokal di Era Reformasi*. Yogyakarta: IRE Press.
- Permana, Yogi Setya. 2019. Politicizing the Fear of Crime in Decentralized Indonesia: An Insight from Central Lombok. *Southeast Asian Studies* 8(1): 99–116.
- Power, Thomas P. 2018. Jokowi's Authoritarian Turn and Indonesia's Democratic Decline. *Bulletin of Indonesian Economic Studies* 54(3): 307–338.
- Robison, Richard; and Hadiz, Vedi R. 2004. *Reorganising Power in Indonesia: The Politics of Oligarchy in an Age of*

- Markets*. London and New York: Routledge Curzon.
- Ryter, Loren. 1998. Pemuda Pancasila: The Last Loyalist Free Men of Suharto's Order? *Indonesia* 66: 45–73.
- Schulte Nordholt, Henk. 2003. Renegotiating Boundaries: Access, Agency and Identity in Post-Soeharto Indonesia. *BTLV* 159(4): 550–589.
- Schulte Nordholt, Henk; and van Klinken, Gerry, eds. 2007. *Renegotiating Boundaries: Local Politics in Post-Suharto Indonesia*. Leiden: KITLV Press.
- Setiati, Eni et al. 2009. *Ensiklopedia Jakarta: Jakarta Tempo Doeloe, Kini & Esok*. Vol. 1. Jakarta: Lentera Abadi.
- Shahab, Yasmine Zaki. 1994. The Creation of Ethnic Tradition: The Betawi of Jakarta. Ph.D. Dissertation, School of Oriental and African Studies, University of London.
- . 2001. Rekacipta Tradisi Betawi: Sisi Otoritas dalam Proses Nasionalisasi Tradisi Lokal. *Antropologi Indonesia* 66: 46–57.
- Simone, AbdouMaliq. 2014. *Jakarta: Drawing the City Near*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- . 2015. The Urban Poor and Their Ambivalent Exceptionalities: Some Notes from Jakarta. *Current Anthropology* 56(S11): S15–S23.
- Smith, Anthony D. 1998. *Nationalism and Modernism: A Critical Survey of Recent Theories of Nations and Nationalism*. London and New York: Routledge.
- 杉島敬志；中村 潔（編）. 2006. 『現代インドネシアの地方社会——ミクロロジーのアプローチ』東京：NTT 出版.
- Tapsell, Ross. 2015. Indonesia's Media Oligarchy and the "Jokowi Phenomenon". *Indonesia* 99: 29–50.
- Untung Widyanto. 2006. Jagoan Betawi dari Cakung. In *Kelompok Kekerasan dan Bos Lokal di Era Reformasi*, edited by Okamoto Masaaki and Abdur Rozaki, pp. 21–44. Yogyakarta: IRE Press.
- Wahyu Prasetyawan. 2014. Ethnicity and Voting Patterns in the 2007 and 2012 Gubernatorial Elections in Jakarta. *Journal of Current Southeast Asian Affairs* 33(1): 29–54.
- Wahyudi Akmaliah Muhammad. 2012. Stereotip Orang Betawi dalam Sinetron. *Jurnal Masyarakat dan Budaya* 14(2): 349–366.
- Whitmeyer, Joseph M. 2002. Elites and Popular Nationalism. *The British Journal of Sociology* 53(3): 321–341.
- Wilson, Chris. 2008. *Ethno-religious Violence in Indonesia: From Soil to God*. London and New York: Routledge.
- Wilson, Ian Douglas. 2006. Continuity and Change: The Changing Contours of Organized Violence in Post-New Order Indonesia. *Critical Asian Studies* 38(2): 265–297.
- . 2008. 'As Long as It's Halal': Islamic Preman in Jakarta. In *Expressing Islam: Religious Life and Politics in Indonesia*, edited by Greg Fealy and Sally White, pp. 192–210. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- . 2014. Morality Racketeering: Vigilantism and Populist Islamic Militancy in Indonesia. In *Between Dissent and Power: The Transformation of Islamic Politics in the Middle East and Asia*, edited by Khoo Boo Teik, Vedi R. Hadiz and Yoshihiro Nakanishi, pp. 248–274. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- . 2015. *The Politics of Protection Rackets in Post-New Order Indonesia: Coercive Capital, Authority and Street Politics*. London and New York: Routledge.
- Winters, Jeffrey A. 2011. *Oligarchy*. Cambridge: Cambridge University Press.

#### 新聞記事

- Berita Satu*. 2013/8/16. Ikatan Keluarga Besar Tanah Abang Ucapkan Terima Kasih pada Jokowi-Ahok.
- Jakarta Post*. 2009/8/28a. New Underworld: Brain over Brawn.
- . 2009/8/28b. Betawi Big Boys Rule Jakarta Underworld.
- . 2009/8/28c. Jakarta Prominent Mass Organization and Ethnic Groups.
- . 2010/7/3. Betawi Organizations Offer Brotherhood to Desperate Jakartans.
- . 2011/12/17. Hard-line Betawi Group Claims Role in Creating a 'Safer' Jakarta.
- Liputan 6*. 2002/3/29a. Forum Betawi Rempug Menyerang Massa UPC.
- . 2002/3/29b. Sutiyo: Saya Tak Kenal FBR.

#### 未公開資料

- FBR (Forum Betawi Rempug). 2012a. *Anggaran Dasar Forum Betawi Rempug (FBR)*. Ditetapkan di Cisarua Jawa Barat. Pada tanggal 12 Rabiul Awal 1433 H (04 Februari 2012 M).

———. 2012b. *Anggaran Rumah Tangga Forum Betawi Rempug (FBR)*. Ditetapkan di Cisarua Jawa Barat. Pada tanggal 12 Rabiul Awal 1433 H (04 Februari 2012 M).

付録 1：ブタウィ結束フォーラム組織原則 [FBR 2012a] (抜粋して訳出)

## 5 章 FBR の記章

### 11 節；記章

FBR は、緑色の円に囲まれた男女のオンデル・オンデルの上部にモスクの塔が三つと FBR の文字があり、下部にフォルム・ブタウィ・レンプックの文字がある絵柄を記章とする。

### 12 節；特徴的装飾品

活動のアイデンティティとして用いられる FBR の特徴的装飾品 (*atribut*) は、上着は袖が長く、スポンは裾が長い、黒に統一された服装に、腰に差したナタ (*golok*)、首に巻いた布 (*sarung*)、頭の黒い帽子 (*peci*) を装着したものである。

(中略)

## 7 章 組織構成 (権限と指導権)

### 14 節；権限

FBR の最高権限は協議会 (*musyawarah*) に存する。

### 15 節；指導権

- FBR の中央レベルの指導権は中央指導部 (*pimpinan pusat*) が掌握する；
- FBR の行政市 (*kotamadya*) レベルの指導権は地方支部 (コルウィル) 指導部が掌握する；
- FBR の行政区 (*kelurahan*) レベルの指導権はガルド指導部が掌握する。

(中略)

## 8 章 会計

### 17 節

FBR は資産を以下から得る：

- 成員の入会金と会費；
- 組織の様々な事業；
- 正当で制約のない援助。

(以下略)

付録2：ブタウィ結束フォーラム組織細則 [FBR 2012b] (抜粋して訳出)

1 章 FBR 記章の詳説

1 節；

原則の中で述べられた FBR の記章の説明と含意は以下のとおりである：

- a. 男女のオンデル・オンデルが示すのは、ブタウィ民族が、男性であろうと女性であろうと、その地位において同じ権利をもつこと、イスラームの教えと相反することがないところのブタウィの芸術文化を愛するということである；
- b. モスクの三つの塔が示すのは、組織の活動と闘争に魂を与える信仰心とイスラームと善行である；
- c. 丸い円が示すのは、ブタウィ民族がひとつひとつの決定を行うときに、統一と団結、相違の一致という価値観を常に高く掲げることである；
- d. ブタウィ団結フォーラムという文字が示すのは、まとまりがあって、有益で、有効利用できるブタウィの集まりということである；
- e. FBR の字はブタウィ結束フォーラムの略である；
- f. 緑色が示すのは涼しさと快適さである。

2 節；FBR の特徴的装飾品

原則の中で述べられた FBR の特徴的装飾品の意図と含意は以下のとおりである：

- a. 黒に統一した服装と首に巻いた布、そして黒の帽子は、勇敢と不屈とを特徴とするブタウィ住民の闘争運動の歴史の色／アイデンティティを表す；
- b. 布と黒の帽子は、イスラーム的道德・道義とブタウィ住民の文化という視点からみたイスラームの特徴を反映している；
- c. 腰にさしたナタは、悪行や抑圧、権力に反抗した勇猛果敢なブタウィの英雄たちの文化伝統を表している；
- d. FBR で着用する全ての特徴的装飾品は、勇敢さと敬虔さ、聡明さ、並びに、知性と分別を蔑ろにせず、傲慢さとは対極にある文化の特徴を表している。

(中略)

3 章 成員資格の承認と停止の手順

6 節；成員の承認

- a. 通常成員は基本的に、当該人物の勤務先にあるガルドを通して承認される；
- b. 特殊な状況で、ガルドを通さずに承認された成員の手続き上の処理は、当該人物の居住地のガルド指導部か、居住地に FBR のガルドがまだない場合は最寄りのガルドに引き継ぎされる；
- c. 通常会員の承認は、成員承認の請願の提出に加えて、FBR の基本方針と目的、諸事業への書面と口頭での賛意表明、および、15,000 ルピアの寄付の支払いを伴った、能動的で複合的な方式を採る；
- d. 請願が通れば、当該の人物は3週間のあいだ成員候補となり、成員候補となっているあいだに当該



の人物が肯定的な事柄を示せば、正規の成員として承認され、成員カードが与えられる；

- e. 成員承認の請願は、法的（*syar'i*）であっても、組織的であっても、強い理由があった場合には、拒否されることがある；
- f. FBR 成員の家族成員は、FBR 大家族成員とみなされる；

(中略)

## 5 章 権限の構成

### 11 節：大協議会

- a. 大協議会（*musyawarah besar*）はプタウィ統一フォーラムにおける最高決定採択機関であり、FBR 中央指導部により編成され、5 年に一度開催される；
- b. 大協議会はプタウィ統一フォーラム中央指導部により指導される；
- c. 大協議会は中央指導部の全ての役員、それぞれの市（*kotamadya*）／県（*kabupaten*）地域支部の全ての役員と、中央指導部が定めた招待客がこれに出席する；
- d. 大協議会は、中央指導部に対して責任をもつ委員会のメカニズムを通して形成される；
- e. 中央指導部は、構成、ドラフト、選挙方法の取り決めを含む、大協議会式典取り決めの規則案を作成する。

(中略)

### 13 節：中央指導部業務会合

- a. 業務会合（*rapat kerja*）は中央指導部によって編成され、全ての中央指導部役員が出席し、大協議会の後に開催される；
- b. 業務会合は、来るべき運営期間に組織が採択する様々な政策について議論するという目的をもつ；
- c. 業務会合は少なくとも運営四半期に一度開催される。

### 14 節：中央指導部調整会合

- a. 中央指導部調整会合（*rapat koordinator*）は全ての中央指導部役員と、それぞれの市／県の全ての地域支部役員が参加する；
- b. 調整会合は、中央レベルおよび地域支部レベルでの組織の調整と統合を行うという目的をもつ；
- c. 調整会合は少なくとも毎月一度行われる。

### 15 節：中央指導部定例会合

- a. 定例会合（*rapat harian*）は、中央指導部によって遂行される運営の日常業務の様々なプログラムとプログラムの様々な政策を議論する枠組で開催される；
- b. 定例会合は中央指導部役員が出席する；
- c. 定例会合は少なくとも一週間に一度は開催される。

16 節；地域支部協議会

- a. 地域支部協議会 (*Muskorwil*) は市／県のレベルでの最高決定採択機関であり、5年に一度開催される；
- b. 地域支部協議会は地域支部により指導される；
- c. 地域支部協議会は全ての地域支部役員、中央指導部の代表者、および全てのガルド指導部役員と、地域支部が定めた招待客がこれに出席する；
- d. 地域支部協議会は、地域支部に対して責任をもつ委員会のメカニズムを通して形成される；
- e. 地域支部は、構成、ドラフト、選挙方法の取り決めを含む、地域支部協議会式典取り決めの規則案を作成する。

17 節；地域支部業務会合

- a. 地域支部業務会合は地域支部によって編成され、全てのガルド指導部役員が出席し、地域支部協議会の後に開催される；
- b. 地域支部業務会合は、来るべき運営期間に市／県レベルにおいて組織が採択する様々な政策について議論するという目的をもつ；
- c. 地域支部業務会合は少なくとも運営四半期に一度開催される。

18 節；地域支部調整会合

- a. 地域支部調整会合は全ての地域支部役員と全てのガルド指導部役員が出席する；
- b. 調整会合は、地域支部レベルおよびガルドレベルでの組織の調整と統合を行うという目的をもつ；
- c. 地域支部調整会合は少なくとも毎月一度行われる。

19 節；地域支部定例会合

- a. 定例会合は、地域支部によって遂行される運営の日常業務の様々なプログラムとプログラムの様々な政策を議論する枠組で開催される；
- b. 定例会合は地域支部役員が出席する；
- c. 地域支部定例会合は少なくとも一週間に一度は開催される。

20 節；ガルド協議会

- a. ガルド協議会は地域レベルでの高い決定を採択する機関である；
- b. ガルド協議会はFBR ガルド指導部により指導される；
- c. 地域支部協議会は全てのガルド指導部役員、地域支部の代表者と、ガルド指導部が定めた招待客がこれに出席する；
- d. ガルド協議会は、ガルド指導部に対して責任をもつ委員会のメカニズムを通して形成される；
- e. ガルド指導部は、構成、ドラフト、選挙方法の取り決めを含む、ガルド協議会式典取り決めの規則案を作成する。

21 節；ガルド指導部業務会合

- a. ガルド執行部 (*pengurus gardu*) 業務会合はガルド協議会の後に、全てのガルド指導部役員によって

開催され、全てのガルド指導部役員が出席する；

- b. 執行部業務会合は、ガルド運営業務プログラムの政策について議論するという目的をもつ；
- c. ガルド執行部業務会合は少なくとも運営期間四半期に一度開催される。

## 22 節；ガルド指導部定例会合

- a. 定例会合は全てのガルド執行部役員が出席する；
- b. 定例会合は、運営業務の様々なプログラムを議論し、地区の諸問題を議論すること、および、会員に関する様々な問題を議論するという目的をもつ；
- c. 定例会合は少なくとも一週間に一度は開催される。

## 6 章 組織の構成と執行部

### 23 節；中央指導部

- a. 中央指導部（PP）；中央指導部は中央レベルにおける組織の運営総体であり、インドネシア共和国首都に拠点を置く；
- b. 中央指導部はブタウィ結束フォーラムにおける最高位の運営総体として、組織の方針と大協議会による決定の実施とに責任をもつものである。
- c. 中央の運営総体は以下から成る；総代表1名、総代表補佐2名、事務局長1名、それを補佐する事務局長補2名、会計局長1名、それを補佐する会計局長補2名、および様々の部署。
- d. 中央執行部の指導による施策の計画を実施するにあたって様々の部署（*departemen*）を形成し、組織の事業計画を実行するにあたって総合的な助けとして機能させる。それには以下のようなものがある：
  - 教育・訓練・幹部部署；
  - 女性の地位向上部署；
  - 芸術・文化部署；
  - 経済機関部署；
  - 住民法律扶助部署；
  - 対住民・組織渉外部署；
  - 青年・スポーツ部署；
  - メンタル・スピリチュアル指導部署。

### 24 節；地域支部指導部

- a. 地域支部指導部；地域支部指導部は市／県レベルにおける組織の運営総体であり、市／県に拠点を置く；
- b. 地域支部指導部は市／県レベルにおける最高位の運営総体として、組織の方針と地域支部協議会による決定の実施とに責任をもつものである。
- c. 地域支部の運営総体は以下から成る；代表1名、代表補佐2名、事務官1名、それを補佐する事務官補2名、会計官1名、それを補佐する会計官補2名、および様々の部局；

- d. 地域支部の指導による施策の計画を実施するにあたって様々の部局 (*biro*) を形成し、組織の事業計画を実行するにあたって総合的な助けとして機能させる。それには以下のようなものがある：
- 教育・訓練・幹部部局；
  - 女性の地位向上部局；
  - 芸術・文化部局；
  - 経済機関部局；
  - 住民法律扶助部局；
  - 対住民・組織渉外部局；
  - 青年・スポーツ部局；
  - メンタル・スピリチュアル指導部局。

#### 25 節；ガルド指導部

- a. ガルド指導部 (GP) は行政区レベルにおける組織の運営総体である；
- b. ガルド指導部はある行政区に少なくとも 100 名の成員がいる場合に結成されうる；
- c. 地域とその住民の状況が必要とすれば、ある行政区の中に 1 つ以上のガルドを結成することができる；
- d. ガルド結成の申請はある行政区のガルド結成主催者によって提出され、3 カ月の試験機関を経たのちに中央指導部によって認可される；
- e. ガルド指導部は以下から成る；代表 1 名、代表補佐 1 名、事務官 1 名、会計官 1 名と、それを補佐するためにガルド指導部によって形成される様々のセクション (*seksi*)。

(中略)

### 8 章 資金と資産

#### 37 節；

- a. FBR の資金はブタウィ住民周辺からの様々な資金源と、その他イスラーム法に適っていて強制力の無い様々な資源から獲得される；
- b. ブタウィ住民周辺の資金源は以下から得られる：
  - 1. 登録料
  - 2. 成員からの月々の会費と寄付
  - 3. ブタウィ住民と協力者からの援助
  - 4. イスラーム法に適った様々の事業
- c. 組織の資産および、資金、会社、建物、土地その他への投資は組織の資産として記録しなければならない。

(以下略)

(2020 年 10 月 16 日 掲載決定)